

くらしと教育をつなぐ

We

特集

性の自己決定

インタビュー：「性器切除と女性の人権」ヤンソン柳沢由実子、「性は聖なるもの」高橋絵里。ジェンダーの二元性を超えて（蔦森樹）、性教育授業顛末記－外性器から男らしさ女らしさへ（向原恵子）。連載：閩都市建設計画（坂部明浩）、フェンスをこえて、居場所考。

1996

6



女と男の家庭科新時代

ニュー



性……
もっとやさしく
もっとたしかに……

セクトロジー！

豊富な資料・
データを収載！
性的教養を育む
"ミミム、エッセンスを
まらめてみました。"
村瀬幸浩編著



B5変形判/定価2500円(税込)

学校の中の
オアシスになりたい！

いま、保健室で……

驚くべき心と体の健康



一読必読の必読書

児童福祉協議会健康教育部
和地
長野県教育委員会健康教育部
和地
保健室づくりの
橋田
A5判・240ページ
定価2200円(税込)

〒615 京都市右京区山ノ内大町5-3 ☎075(841)9278 **東山書房** 〒104 東京都中央区新川2-2-1・708 ☎03(3553)8358

農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1
☎03(3585)1141 各税込定価
●内容見本

●家庭科に生かせる
おもしろ料理本！



●家庭科に生かせる
おもしろ料理本！

●国産小麦のお菓子とパン
林弘子著・粉の特徴を生かして手作り酵母で焼く。グルテン分の多い輸入小麦の常識をくつがえす。日本・お菓子には1400円

●食とからだのエコロジイ
畠田彰夫著・伝統的な食生活や日常の「食術」の再検討から、食事指導や学校給食のあり方、栄養学の問題点を明らかにする。*1700円

●NCLの会は、今必要な本をお届けします！
24出版社・40シリーズを厳選
収録のカラー目録進呈中！
最新版の選書キーワード・スーパ
ヒーロー④哲学と科学④大好き
な本④調へ学習④学校図書館充実
④ピエオ・CD・紙芝居④生涯学習
④小・中学校へ6月末日まで、無料学習
進呈中！事務局・農文協へ。

●中学・家庭科ビデオ



●好評
■心と体と食生活(食物)23分・VHSカラー
食事と体・心の健康管理をやさしく解説

●圭介の家事体験 家庭生活 23分
母が急用で帰郷。ルス中の食事は？洗濯は？ゴミの始末は？てんやわんやのドラマの中で、家族のなかの自分、家庭の仕事、地域を考える。
●VHS・カラー *定価128075円千400円

●家庭科の先生に
大好評です！



増尾清・東畑朝子先生
他のプロの目が科学的に書き下した信頼ある本です。



●食べて通れない食品不安に陥える大好評シリーズ！
不安な食品シリーズ ●それではあな
は食べますか？
学校図書費でベストセラー *全11巻・揃い35000円

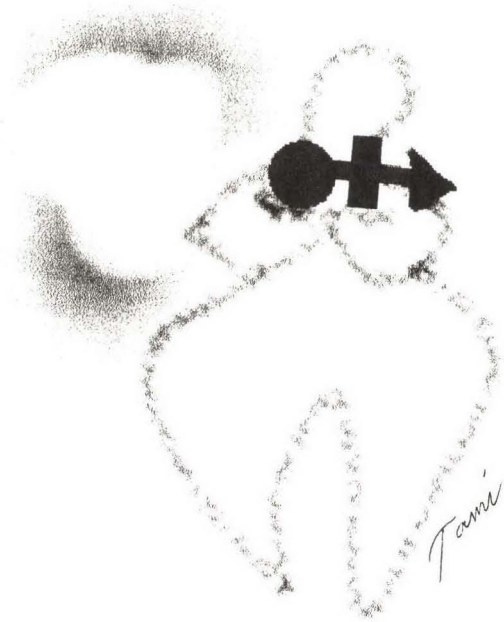
●食品添加物つきあう法
不安な食品表示がわかる本
不安な食品つきあう法
台所用品の不安つきあう法
食へのものメリット・テメリット事典
自然食は安全か
卵・食へ方上手は不安知らず
肉こうして食べれば心配ない
塩・あなただはまだ不安ですか
油・このおいしくて不安なもの
水こうして飲めば心配ない

くらしと教育をつなぐ

We

6月号

特集 性の自己決定



《インタビュー》 複眼でみる

ヤンソン柳沢 由美子 さん (聞き手/稲邑恭子)

性器切除と女性の人権.....4

連
載

- 神戸から 前田 圭子30
- 女が歳をとるということ 木村 栄31
- 閩都市建設計画 坂部 明浩.....32
- 変な子じゃないよね 滝野澤直子.....34
- 母と娘の500日 森津 純子.....36
- 蔦森樹の巡業日記 蔦森 樹53
- セックスレスなわたしたち 望月 七海.....54
- 違いがわかるクリーミーな相談室 坤 恵依子.....56
- 居場所考 水田 宗子.....58

- ◇ 学校包人「家庭科の森学園」1日体験入学レポート.....42
- ◇ 読者の広場.....61
- ◇ 編集後記.....64

特集 性の自己決定

- ☆ ジェンダーの二元性を超えて 蔦森 樹12
- ☆ 性教育授業顛末記
外性器から男らしさ女らしさへ 向原 恵子.....18
- ☆ インタビュー 高橋絵里さん (聞き手/坤 恵依子)
性は聖なるもの 24

女と男の家庭科新時代

- 家庭科何はともあれHELPキー 38
林咲子・小林由佳・浅井由利子
- 知りたい・知らせたい共学家庭科 芦谷 薫44
- 家庭科—風がかわる匂いがかわる 蔵本 佳子.....46
—「買春」をめぐる1—
- フェンスを越えて 小平 陽一51
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎52

複

眼

で

見

る

インタビュー

女性器切除と 女性の権利



ヤンソン
柳沢 由美子 さん

北京会議に出かけて以来、パワー全開の梶原公子さんから、ヤンソン柳沢由美子さんにアフリカの女性性器切除の問題をお聞きしたいとの電話があった。リプロダクティヴ・ヘルスの問題に長年取り組んでいらしたヤンソンさんには、いつかお話しを伺いたいと思っていた。

(聞き手/まとめ 梶原公子・稲邑恭子)

ヤンソンやなぎさわ ゆみこ 一九四三年生まれ。女性文学の翻訳、内外の女性事情についての著述、評論、講演が有名な活動。「女性の性器切除と人権侵害に反対し行動する私たちの会」代表。著書に『私たちのフロンティア』(フレール館)『男が変わる』(有斐閣)、訳書に『喜びの秘密』『カラーパープル』(アリス・ウォーカー、集英社)他多数。

女性性器切除とは

梶原 ヤンソンさんが翻訳されたアリス・ウォーカーの『喜びの秘密』（集英社）を読んで、FGM（女性性器切除）のことを初めて知り、とても驚きました。こんなひどい話がいままでどうして伝わってこなかったのかとショックでした。北京会議でも、私は気づかなかったのですが、取り上げられていたのでしょうか。

ヤンソン FGM廃絶を訴えたアフリカからのワークショップはいくつも開かれていたのですが、FGMという略語だったので日本人にはわからなかったのですね。

私が『喜びの秘密』を手に入れたのは九二年の秋で、翻訳を始めたのが翌年だったと思います。これはフィクション（小説）ですが、そのもととなった事柄は事実です。ですが、その事実をアリス・ウォーカーのニュースソース以外のところからも確認しなければと思って、いろいろな資料を読み進めていくうちに、改めてその規模に驚きました。例えば、国連の人口基金が昨年発表した「世界人口白書」では「危険を伴う習慣」という項目に関連して「女性性器切除」のことが大きく取り上げられ、毎年二百万人以上の

少女が性器切除を受け、その数は推定で八千五百万人から一億千四百万人にのぼるといふ数字が出ています。いま、この地球上に五七億の人がいますが、五七億の半分が女性だとして二八億。そのうちの一億にのぼる女性がそうだとしたら、これはやはり想像を絶するほどの数です。

FGMのための調査というのは、各国で行われているわけではありません。ただ、どの部族に性器切除の習慣が根強いかということはだいたい分かっていると言われています。調査はまだ始まったばかりですが、この性器切除の問題は、民族の誇りとか伝統とか守るべき風習として見過ごせないような危害があることが認識されはじめました。そこでWHOなどが乗り出して来たわけです。

FGMはアフリカ・中近東・アジアの一部（イスラム教国であるインドネシアとマレーシア）で行われてきたのですが、どうして今まで知られてこなかったのかというと、それは、秘密の女の儀式とされてきたということがまずひとつ。それから、他の人が外から知ろうとしても「これは私たちの問題。あなたたちに口出しされる覚えはない」と反発されるような、他人に知られたくない、非常に微妙な問題であったということ。したがって内側から告発することも、外から告発することも難しかったのだと思います。

種邑 文化人類学では、性器切除の問題は随分前から知られていたようです。

ヤンソン ええ。でも、それは入れ墨をしたり、口に輪をはめたり、耳を長くしたりというようなことと同じように、「あれはあの人たちの文化だから、我々がとやかく言うことではない」というふうに見られていたのです。

それに、性器切除の内実そのものがよく知られていなかったということがあります。「性器切除」と言うと、「性器を切除するってどういうこと？」と、みんな問い直しますけど、「女子割礼」と言うと、「ああ、割礼ね」と、ペニスの包皮にちょっと切り込みを入れる儀式と同様のものだろうと思ってしまう。でも、実際は、クリトリスの先端を切りとる一番軽いものは少なく、いちばん多いのが、クリトリスと小陰唇の切除、次に多いのが、クリトリスと外陰部全体を切除し、尿と経血のための小さな穴を残し縫い合わせるという残酷なもので、消毒や麻酔もなく行われるから、感染症や出血多量による致死に至る場合もあるのです。「女子割礼」は英語では Female circumcision と言ってきたのですが、これを「割礼」と呼ぶことによって実際の内容を隠蔽してしまうんですね。そこで最近「割礼」ということは「女性性器切除」と言い直されるようになった。

りました。このようにとらえてはじめて、女性に対する暴力だということが分かります。

それに加えて切除による痛みが、切除の時だけでなく常にあります。性行為のある間ずっと痛みを伴うことになる。出産に際しても大変な痛みを伴う。それから排泄器官と密接につながっていますから排泄に支障がでるし、腎器官に影響を与える。だから性器だけではなく、女性の健康や人格というものに対する重大な侵害なのです。

これは、性器を切除された女性の体の写真です。実は私のこの写真を見てそれまでの迷いがふっ切れたのです。それまでは、「やはりこれは他国の文化のことではないのか。私たちが口出しすることではないのか」という迷いがやはりずっと私の中にもありました。でも、これを見たとき、これはおぞましい暴力だと思いました。これを文化と呼ぶことはできないと確信しました。

実は、一九八〇年、コペンハーゲンでの、第二回世界女性会議のNGO会場で、あるアメリカの白人女性と黒いヴェールをまとったアラブの女性が激しい口論をした場に居合わせたことがあるんです。アラブの女性が「欧米のフェミニストにこの問題を口出しされたくない」と言い張り、そのとき私は性器切除というものを初めて知っ

て呆然としました。その場にいた他の女性たちもおそらくそのことを初めて知り、そして、これを批判することは他国の文化干渉になりそうだから、口出しするのはやめようと胸に刻んだのだと思います。その後、九〇年代に入るまで、FGMのことは世界の女性運動の中でタブーとなってきたりがあります。この対立が異文化の衝突の次元で受けとめられ、FGMを女性に対する暴力としてグローバルにとらえる機会にできなかったことは私の中でずっと悔いとして残っています。

性器切除の情報は日本でも、例えば『イヴの隠れた顔』（サダウィ）という本などや、女性が性暴力を告発した映画『声なき叫び』の中にもFGMのシーンはあったのですが、情報が入り方に限界があることもあって、国際的連帯という線が非常に弱い。FGMのことも、いまだにひと昔前の南北フェミニストの対決のイメージで語られているように思います。

当事者がイニシアティブをとる

八〇年代に入って、アフリカの人たち自身がこの問題を取り上げるようになってきました。ガーナやセネガルから

の移民が中心になって、ロンドンに「マイノリティ・ライツ・インターナショナル」というグループを作っていますし、スーダンの女性が始めた「レインボー」というグループは、ニューヨークに本部を置き、活動を始めています。世界が沈黙してきた中で、アフリカ当事国の女性たち自身が着々と準備を進めてきて、イニシアティブをとって活動するという動きが出てきているんですね。

私は、ひとりでも性器を切除される女の子が減ればいい、一日も早く廃絶したいとの思いで、「当事国の人たちの神経を逆撫でしない方法で支援するには、いったい何ができるだろうか」と考え、仲間を募って、この春、「女性の性器切除と人権侵害に反対し行動する女たちの会」を日本で起こしました。この習慣を持っていない国の女性たちが、当事国の女性たちと連帯するためにできることはといえば、イニシアティブはアフリカやアラブの女たちが取り、必要などころに支援の手を送るということになるのではと思います。

「インター・アフリカン・コミティ」というNGO（非政府組織）は、二六の国から成り、各国の中にNGOの組織委員会を作って活動しています。民間の団体ですが、その活動は、村や地域の中に入って行って、権力者たちに女性

の性器の切除を止めさせるための働きかけをするわけですから、楽な仕事ではありません。そういう活動を実際にやっている人たちとつながることが大切だと思うのです。

ただ、これはいまままで習慣とされてきたことに対して、生活の中から「ノー」と言っていくわけですから、大変なことなんです。国外に逃亡する以外に逃れる方法がないとか、父親に知れたら、イヤだという気持ちを感じ性器切除をするまで拘束される、最悪の場合殺されるという話もあります。またアフリカの女性たちの間でも「女性の性器は汚いものだから、切り取ってすっきり縫い合わせてきれいにしましょう」と言う人がいる、そんな中での活動なんです。

稲邑 ある文化人類学の本に、アフリカでは父系制の地域と母系制の地域が混在し、処女崇拜が強く性器切除をしたりするのは父系制の地域だと書いてあって、そのときは何気なく読んだのですが、要するに、女性の性的能力を恐れていると……。

ヤンソン アフリカの地域にはいろいろな迷信があります。なぜクリトリスを取ってしまうのかと言うことについても、「生まれてくる赤ん坊が女のクリトリスにさわると死んでしまう」とか、「女が性的に興奮するとクリトリスが立ち

あがって腿に触れ、男のペニスと同じようになるから早く摘まなければいけない」とかいうことが信じられている。

性器を切除することの意味は、女に力を与えないため。女が自分の性をコントロールするようになると、男の支配の外に出るからそれを押さえつけなければならぬ、ということなのです。また、「処女崇拜」というのはこの場合結婚するまでは誰もその女とセックスできないというからだを作ってしまうこと。排尿と生理のための小さな穴だけを残して閉じてしまう。なぜ、そうするのかということ。さらに考えると、男性による究極の女性支配という局面が出てきます。

そこを閉じられているということは、走れない、跳べない、力を入れることができなくなる。それが「女」を作っていくわけですよ。当然、積極的に行動することができない女、男性に従順な女がでかがる。

もうひとつ、男の快楽のため、ということがやはりあると思う。セックスのとき「女（の性器）はきつい方がいい」ということのためですよ。これなどは、日本でも信じられていることではないですか。縫い合わせてまできつくしようということはないかもしれませんが。でも根本にある考え方は同じだと思います。

エイズ防止のためではなく

ヤンソン ひとつ気になっていることがあるのですが、国際機関がこの問題を公にしたことは、人道的な意味でよかったですという気持ちがある一方で、苦々しい気持ちがあるんです。というのは、女性の性器切除がエイズの感染経路になっているから問題だということで、初めて問題視されるようになったのではないだろうかと思うからです。

梶原 女性の人権を守るためではなく、エイズ防止のために反対するということですか。

ヤンソン そうなの。女性に対する性暴力に対してこんなに社会的認識が低いのはどうしてかしら。私は早く止めさせることができるなら、エイズ防止のための運動から始まってでもいいと思っています。でも性器切除の本質は女性支配なんですね。女性解放と女性への支援なしにこの問題をエイズの問題からだけ見ていたら、とんでもないことになる。

例えば、感染症や合併症を起こしたりするから合法的に病院でやりましょう、という考えにも通じます。実際にエジプトではそうなったことがある。九四年の秋にエジプト

のカイロで国際人口開発会議が開催された時、CNNが撮ったビデオを見ましたが、カイロ郊外の理髪店でこの手術をしている。エジプトは男がこの手術をする数少ない国です。それはほんとうにひどいの。九歳ぐらいの女の子が、周りのみんながお祭り気分の中、ニコニコしながら部屋に入ってくる。それで父親に押さえ付けられて股を広げさせられて、男はおしゃべりしながら切除する。その女の子が動物が殺される時のような悲鳴で、力の限り泣いている横で、男たちは雑談したり祝杯気分で、その女の子の痛みを誰もケアしない。九歳の子にだって、男たちの前で脚を広げることが恥ずかしくて怖いことだと分かる。そのシーンが終わった時、その子が、「あなたたち全部、この部屋にいるみんなに呪いをかけてやる！ 私は絶対これを忘れない！」と叫ぶの。

これが放映されたことで国際的非難がたくさん寄せられたのですが、それに対してエジプトの大統領がしたことは、「分かりました。これはたいへん危険なことだから病院でやりましょう」と、見当違いな大統領令を出したのです。

「合法的に病院で性器切除するなんて、とんでもないことだ」という運動が、女性たちから起こりました。病院でやればいいのではなくて、性器切除そのものが問題なのだ。

それで、ようやく一年後再び大統領令が出て、病院での性器切除は廃止になったといういきさつがあります。

女性性器切除そのものが女に対する暴力、人権侵害であって健康破壊なのだ。病院でやればいいというのではなく、してはいけないというところから始まらないと、「抗生物質をあげればいい」、「術者を教育して、カミソリを十分殺菌消毒させればいい」ということになってしまいます。

稲邑 お話を伺っていると、アフリカだけのことではないのではないかと。フロイトもクリトリスに快感を感じるのは女として未成熟のしるしであると言い、リブの論客が反論し大論争になりましたよね。いま、出産時に会陰切開をされることに対して、疑問を呈している産婦人科の女医さんの話を聞いたことがあります、そのあたりともつながってくるのではないかと思います。

ヤンソン 性器切除というのは、ものすごく具体的なことであると同時に、象徴的なことだと思います。女の性器を支配することが、どんなことなのかを明らかにしているでしょう。性器を取るといえるのは、女に自主性を持たせないということ、女に性生活も含めて、自分の人生をコントロールする力を与えないという究極の支配です。

ですから、この問題は、どうしたら父系制の社会から女

性たちが経済力を持って自立できるかという課題と並行して取り組まなくてはならないのではないかと思います。

この地域の多くは、家父長制が絶対で一夫多妻の地域で、性器切除と縫合は女性に処女や貞節を守らせるための風習としてあった。ですから性器切除だけを拒んでも、一夫多妻で暮らしている限り、女性に力のない状況は変わらないのね。そこで、どうしたら女性たちが経済的自立ができるのか、そのための教育や職業訓練と合わせて、生活文化を変えていかなければと、いま当事国の女性たちが立ち上がっているんです。

この運動は、性器切除の廃絶という目的が達成されたら終わりなのではなく、女性支配を跳ね返す運動としてアフリカの女性たちと一緒にやっていくと考えると、男性支配は残ってしまいます。日本の現状でも、女性たちが性のことを話しにくい状況は日常的にあるでしょう。

梶原 授業で高校生に「性情報をどこから得ているか」というアンケートをしたら、男子のトップがエロ本やポルノなんです。また、女子にとっても自分たちが男のセックスの対象物として見られている実感がないんですね。

ヤンソン 人間として、同じ高さで男も女も影響したりされたりという交流がないところで性行為だけが行われる。

そういう交流なしのセックス像だけが流布してひとり歩きしているのね。男のイメージを押しつけられて、男のいいようになるという意味では、性器切除の問題と日本のいまの性文化と共通項があると思います。

これは、日頃おかしいと思っっているのですが、日本の女性運動はいままでずっと女性差別をなくすということやってきたのに、いま、自治体や行政は「男女共同参画社会」を築くためにとって、「男女平等」や「女性差別撤廃」という表現を入れなくなっただけでしょう。「共同参画」というのは、女性差別をなくすための一つの参加の仕方であって、それが目的ではないはずなのに。

これは先の長い、気の遠くなるような女性差別廃止の運動のひとつです。けれど、どのような経路にしる、この運動に参加していきたいと思っています。

まず今年の六月にアリス・ウォーカーの作ったドキュメンタリー映画上映会を開きます。これは彼女が直接アフリカに行って切除者の老婆や切除に反対して運動を起こしているさまざまな女性たちにインタビューしているものです。彼女自身がこの問題にどういうところで関わり、自分の問題としているのか。アフリカの女性たちの傍らに立っていることがとてもよく伝わってきます。

私も直接彼女に会って気づいたのですけれど、アリス・ウォーカーは片目が義眼なのね。事故で失明したという話は作品の中で何度か出てきていましたが、どのように起きたのが、映画の冒頭の部分で語られるんです。

二歳年上のお兄さんが両親からクリスマスプレゼントにもらった空気銃で彼女を撃った。黒人の貧しい家の唯一の娯楽は西部劇だったのね。その西部劇の真似をして、ある日妹をねらって彼女の目を撃った。彼女は失明してそのことを誰からもケアされないまま、物につまずいたり、友だちからばかにされたりして、何度も自殺をしようとする。彼女は性器を切除された女の子たちの痛みに、そうした彼女自身がぐぐってきた苦しみを重ね合わせて見て、そこからこの作品を作っているのね。これは、ぜひ多くの方々に見ていただきたいと思っています。

「女性の性器切除と人権侵害に反対し行動する女たちの会」

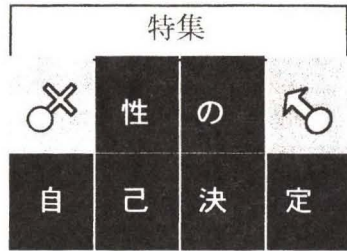
連絡先…東京都江東区牡丹3-14-9-402 田中芳

(〒135) FAX 03-3641-7883

年会費…一口3000円/団体一口10000円

郵便振替…00170-8-580948

(口座名…FGMに反対する女たちの会)



向原先生との出会い

自分の仕事、お金を超えた魂の仕事が、どこへ向かって私を引っ張って行こうとしているか。見当もつかないような仕事や出会いが実際に起きることが多々あります。そのひとつが、三月に行われた大田区立東糀谷小学校の二年生の性教育授業へのゲスト参加でした。

担任の向原先生は、昨年末に横浜で開かれたキム・ミヨンガンさん（性人類学）と私のトークショー、「崩れ行く男の甲斐性」の会場に偶然いらしてくれました。

ジエンダーの
二元性を超えて

蔦森 樹



そのキムさんと私のトークショーはこれが二度目。今回の主催者・未来文庫の中西さんたちは、三年前に「女も男も知りたい男のSEX キム・ミヨンガンVS蔦森樹」の会場にいらっしゃったのでした。当時の私は協調という言葉とその大切な価値をあまり（というよりは、ほとんど）理解していなかったように思います。『キムVSツタモリ』の字に躍らされて、敵対する理由がないのに戦いのバトルのような関係を持ってしまい後味が悪かったです。もう一度キムさんと仕事ができるなら、今度は調和のなかで話をしたいし話を聞きたいなあ、何

よりも言葉を超えて一緒にいるということを感じられたらなあ、と思っていました。

その横浜の会場で、今回私は、「男と女があるという分離を前提として信じているからおかしくなる。男女平等とか男女同権とか男女共生とか言っても、結局は誰もが男と女を同じ人間だと信じていないのだからうまく行かなくても当然。違いではなく同じということを理解することなしに男女の公正などありえない。そもそも人という生物は女性形であり、(男も女も)女というひとつの存在ではなかったのか。また女性性として意味づけられ、低く見られていた価値こそ大事なことでなかったのか」と、にこやかに言い放っていました。

かねてからそう思っていました。これほどはっきりと言えたことは以前にありませんでした。ちょうど岩波の社会学講座にそういうことを書くことができて、やっと言葉にして言えるようになった、その直後の講演でした。私はそのことを言えたことに満足したのですが、しかし聞いていた向原先生は、「なんてことを言っているんだ。それじゃ男と女の違いを教えて来た私の性教育の十年間はなんだったんだ?」と動揺したそうです。

そんなこととは露知らず、私は質問に立った先生を見て「ずいぶん顔の暗い人だなあ。なんか深刻でやだな。関わらないようにしましょう」などと思っていたのだから大変失礼な話です。

そしてしばらく後に、「新しい一八〇度違う性教育を試みたいので、その同じところがわかるような資料を教えてください」という連絡を彼女から受けましたが、三ヵ月後、まさか二年生の教室に参加することになるとは夢にも思いませんでした。それにしても、事前の打ち合わせの時に、それまでは電話でやりとりをしていた向原先生とお会いしたのですが、それが全然明るくって、さっぱりした好い人でした。あの時はよっぽどシヨックだったのだろうと気がつき、その仕事への真摯な取り組みを知って、私は深く反省していました。

テレビも入ってにぎやかな性教育

向原先生からお話があったのとちょうど同じ頃、テレビのお話がありました。私を三〇分のドキュメント番組で取材したいというので、それじゃ授業の様子も絵に収

めたらどうですかと提案しました。テレビのディレクター氏は乗り気で、向原先生を説得して（そして手をわずらわせて）教室にカメラが入ることになりました。

この番組は「ナビゲーター96・男でもなく女でもなく」として四月三〇日に放映されましたが、教室にカメラを入れてもらおうと思った私の目的は、自分のことのほかに、もうひとつありました。それは向原先生や同僚の先生方との連携で行われる性教育の『画期的で』そして間違ひなく『日本初』の授業を、こんなことが行われているんですよと紹介したかったのです。

おしべとめしべ的な授業でもなく、ペニスの反対はワギナという、間違った生物学的性の常識を踏襲し、それが根拠となった性の政治性（男女の不正）を根本的に容認継続させてしまうだろうというゆる性教育でもなく、その嘘を剥ぎ、ペニスはクリトリスであり、陰囊は陰唇であり、女の子にはワギナがあり、男の子のワギナは『閉じている』というセイブツガクジョウの正解をその名称と共に正しく伝える。そのことで人間には男と女があり「互いに相容れることのない別の存在である」という還元主義によるジェンダーの二元性を超える下地が作

れる。『性教育は人権教育です』と言う向原先生方の信念と授業の今後に弾みがつけばうれしい限り。そのためにも違いを固めることよりも同じことを知るといふ見方を、画面なら短時間であっても提示できるのではないかと私はそう思いました。

また、授業は私が参加しなくても当然成立するものですが、今回参加することで生徒さんたちが多様性の実際をかいま見、胸に湧き起こる偏見の気持ちやそれがどういう感じなのかを各自にそっと気づいてもらえばいいのではないかと。人権教育という意味ではそれが役に立つのではないかと思いました。当日は、公開授業の形で父母の方や先生方が見守るなかで行われましたが、こういう形を取り続ける向原先生には非常に信頼が持てました。

三月いっぱい無事定年を迎える男の校長先生は、私を避けるような形で接してくれましたが、あとで聞けばその理由が、「男の作家が女装してるっていうから、花森安治（『暮らしの手帳』創刊者）みたいかと思ったら、女だった」のでびっくりしたのだそうです。この話を知り合いの年配教師にしたところ、「そりゃ、校長先生も最後の最後にかわいそうだったねえ（笑）」と同情して

いました。

今回、私にとって最も印象深かったのは、途中、生徒さんから「おかまですか？」という予想された質問が出た時でした。私はその子に「そうです」と簡単に笑って答えていました。

向原先生はきつと、「それは差別的な言葉だから使っちゃいけない」というような答えを期待したかもしれない。ですが、この授業では、放課後に性で色が分かれたランドセルを男女が取り替える実習があるので、そこで他人にいろいろ言われてどういう気持ちがあるかを体験してもらえば答えの代わりになるでしょう。ただにこにこしている私に代わって、先生は、「みんなは、おかまっていう言葉を『おともだち』とか『なかよし』って意味で使っている？」と質問し、生徒は「うん」と首をふりました。聞いていて、これで仕事は完璧だと強く感じました。

私の宝もの

数日後、子どもたちの感想文が送られてきました。字

の形からなにからほんとかかわいくてたまりません。何だか孫でもできたような、目に入れても痛くないような気持ちになる自分が不思議です。これは宝ものですね。あったかい。とてもあったかいのです。これを読みながら死ねたら幸せ。そんな気持ちでいっぱいです。

今回、テレビの取材を含めた諸事、先生方にはたいへんお世話になりました。また父母のみなさんにもご理解をいただき感謝しています。ここに紙面を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

子どもたちの感想から

はしづめ 絵里か

先生といつぐらいに、ともだちになったんですか。むかしの色はせんぶあったのかとおもったけど、ない色もあったから、びっくりしました。つた森さんが女の人のかっこをしてたから女の人だとおもっていたら男の人だったから、びっくりしました。何ぞぐらいで女の人になりたいと、おもったんですか。何

んで、かみのけをのぼしたかったのかなと、おもったら、かちゅうしゃとかをしたから、かみのけをのぼしたのかなとおもいました。

べんきょうしたこと

ひらやま あさみ

わたしは、男も女もさいしょはきまってんのかとおもいました。でもべんきょうをしたらよくわかりました。そして男も、女も、おんなじだったのがわかりました。しらなかったことばも少しおぼえました。いんのうとか、クリトリスとか、いんしんとかが、わかりました。つた森さんと話せて、すごく、おもしろかったです。

せい教いく

とよ田 しょう太

今日はせい教いくの話を聞いていて、いろいろなことがわかりました。とくに、クリトリスと、いんしんと、いんのうがわかりました。あと、つた森さんは、さいしょ女だとおもっていました。前でしゃべったとき男のこえだったからびっくりしました。またつた森さんといういろいろなお話をしたいです。

はせがわ きみこ

小さいときから、かみの毛をのぼしているんですか。小さいときから、女の子に、なりたかったですか。小さいときにスカートをはいたことは、ありますか。すきな色は、なにいろですか。はじめに、つた森さんとあたときつた森さんがしゃべて男のこえがしたのでびっくりしました。でも、だんだんなれてきていっしょにしゃべったりべんきょうしてとてもたのしかったです。

体でわかったこと

川ぞえ 大さ

ぼくは、生まれる時男と女はちがうと思っていたのに同じだったのでびっくりしました。おかまの人でも声は女の人になれないんだと、思いました。

みね きょうへい

ぼくは、つた森さんに、聞きたいことがあります。なんのりゆうで、女になりましたか。はじめは、どんなふうに思いましたか。女の気もちは、どうですか。ぼくは、外で赤いランドセルで、歩いてみたとき、少しはずかしかったです。

つた森さんのこと

ふじ野 えりか

わたしは、はじめつた森さんのことを女だと思っていました。そうしたら、むこう原先生が「この人は男ですよ。」と言いました。そして、わたしはともおどろきました。わたしは、「つた森さん男だったの」と言ってしまうました。何オぐらいで女になったんですか。

体

す山 ゆい

しつもん つた森さんは、どうしてけっこんしたのに、女になったの。けっこんした人は、なっとくとかしたんですか。
わかったこと むかしのころの女と男の色とかふくがわかりました。

しつもん つた森さんは、男なのにおばいのふくらみがあるんですか。

思ったこと なんで、せいきが男とか女とかきめるんですか。うれしかったこと 今日、つた森さんとあえてうれしかったです。でもちょっとこわかったような気がするのです。

5時間目のかんそう

ながしま のぶつか

ぼくは5時間目の体のべんきょうで、先生のお友だちが来て、さいしょは、かみの毛を見て女の人だと思ったけど、声を聞いて、男か女か考えている時、先生が男の人だと教えてくれました。そして、おかまは、ぼくが、考えていた人とはぜんぜんちがいました。それから、先生が、ランドセルをとりかえたい人は、とりかえていいですよと言いました。それでぼくは、松原さんにランドセルをとりかえてもらって帰る時、はずかしくて、あした、学校へ行くのがはずかしいです。

じゅぎょうのこと

つたもり たつる

今日のじゅぎょうにさんかしたら、みんながあんまりかわいくって、むねがいっぱいになってしまっって、ほとんどしゃべることもできなくて、しつもんにもうまくこたえられませんでした。でも、向原先生が私のいいことをつうやくしてくれました。でも、向原先生が私のいいことをつうやくしてくれました。おを見ていたら、おわりの時間になってしまいました。なんだか、もっといっぱいあそびたかったなあ、と思いました。

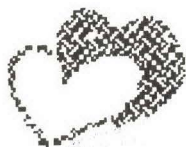


性教育授業顛末記

外性器から 男らしさ女らしさへ

向原 恵子

(大田区立東糀谷小学校)



薦森さんとの出会い

それは、一枚のチラシから始まった。

十二月のある日、私は一枚のチラシを見ながら迷っていた。金氏と薦森氏の対談のチラシ。テーマの「とらわれの性」という言葉と、薦森氏のプロフィールにひかれ、結局行くことにした。それが、薦森さんとの出会いだった。

そこでは、戸籍のこと、性のことが語られた。「男女

共生の性教育を、もっと効果的に進めるにはどうしたらいいと思いますか」と私は質問した。薦森さんは、「違いを探しているからだめなんだ。女がX X、男がX Yは間違い。YはXの垂流。X XとX Xなんだ」と答えた。

私は動転した。納得はしないながらも、今まで十年以上自分なりに勉強しコツコツ積み上げてきたものが、ガラガラと崩れ去る思いだった。「どうしよう。これを聞いた以上、これまでの性教育はできない。もっとよく薦森さんの話を聞きたい」。そう思って、対談終了後、再度質問に行き、名刺をもらい、授業にゲストで来てほし

いかどうかという返事だった。また、蔦森さんの講演記録に保育園が入っていたのを知り、保育園でできるなら学校でも何とかなると大いなる勘違いもした（保母と保護者対象の講演だと気付いたのは、随分後になってからのこと）。

その日は、「何が何でも蔦森さんと呼ぶ」と興奮して帰ったのをよく覚えている（だが、蔦森さんはこの時のことを称して、「ブラックホールのような人だった。あまり関わり合いになりたくなかった」と後で教えてくれた）。何たる出会いの落差。

蔦森さんを口説き落とす

その後、私の母が病気で入院したこともあって、一月末までは何の展開もなかった。しかし、研究奨励論文の奨励費が入ることになり、この金額にもう少し足したら何とかOKしてくれるのではないかと目論んでいた。母の手術も成功し、精神的にも余裕ができたので蔦森さんへの交渉を開始した。

私の性教育への考え方を話し、「ぜひ授業に来てほしい」と言うと、とても好意的で、「金額のことは気にしなくていいから」と言ってくれた。私は急いで資料を送った。折り返し、蔦森さんの資料が送られてきた。ところが、「残念ながらお役にたてそうもない」というコメント付きだった。私は先日の好意的な返事が記憶にあっただので、めげずに電話してみた。今度はうって変わった態度で、「講演料が安すぎるから無理です」とにべもない。

さすがにショックだった。だが蔦森さんという人は、お金のことだけであんなに態度をかえる人だろうか。本当は来たくないのに断る口実にしているのではないか。私は疑問をそのままに引き下がるのができない性分なので、再度電話し、単刀直入に聞いてみた。「私は、そんな難しい人ではありません」、それが返事だった（でも、本当は行きたくなかったんだって、ずるいなあ）。私は、スポンサー探しを始めた。蔦森さんの対談の時に知り合ったAさん。ベネッセコーポレーションで季刊『子ども学』の雑誌作りに携わっている。電話をして早速それらしい話をしてみたが、どんな授業になるかもわ

からないし、たった一度話をしただけのAさんに、さすがの私もスポンサー探しの話は切り出せなかった。

次に大田区の男女平等推進室に当たってみた。ここが成人の日に配る冊子に薦森さんを載せていたので、こういう授業をしたいので何か使える予算はないだろうかと聞いてみた。おもしろいとは言ってくれたが、だめだった。私は、我が月給からいくら回せるか、いくら出せば来てくれるのか考え続けた。

ところがある晩、薦森さんの方から連絡があり、『We』の取材を受けて、そこに私も原稿を書き、その稿料を薦森さんに差し上げるといふことで講演料の不足を補うこともできますよと、うれしい提案があった。授業の構想も何もないのに、私は躍り上がって喜んでいった。

授業の構想作り

授業の日は三月十二日。九日に打ち合わせと決まり、それまでに指導案を作ることにした。

外性器についての授業をする。薦森さんをゲストにする。決めていたのは、これだけだった。十二月以来ずー

っと考え続けてきたが、どうしても構想がまとめきれなかった。そこで先ず、ペニスとワギナを対にして教えていたのを、今回は、もとは同じ性器が受精後のホルモンの関係で形が違ってくることから、ペニスとクリトリスを対にして教えることに決めた。クリトリスと口に出すとき、十年以上前に初めてペニス・ワギナと言った時の胸のざわめきを思い出した（授業後、子どもたちは、〃あそこ〃と言うよりもクリトリスって勉強した言葉で言うほうがエロくないと言っていた）。

次に、ジェンダーについて二年生なりに考える教材として色と服装を使うことにした（教材はほとんど養護のS先生に手伝って作ってもらった。同学年のT先生とは同じ授業をしようと、薦森さんとの打ち合わせにも一諸に合った）。

また、その頃、私のクラスで友だちの悪口を「おかまの〇〇」とノートに書く事件があった。「おかま」という言葉が子どもたちの世界で差別語としてはっきり出ま上がっていることを表していた。ジェンダーを問う中で、自分らしさについて、そして、「おかま」変態」と思っていることについても考えてほしかった。そのために今

回は薦森さんに登場してもらうことにした（子どもたちに薦森さんを会わせることに関しては、薦森さんの人柄で子どもたちにすぐに受け入れられると確信していた）。こうして授業の流れが決まった。

授業を取り巻く条件整備

薦森さんに来てもらうことで一番気をつかったことは、授業内容も見ず、薦森さんのことも直接知らず、風聞だけで「おかまを授業に呼ぶとはけしからん」と言われるような訳の分からない事態を避けたいということだった。そこで、男女平等推進室の冊子を取り寄せ、大田区でも評価している人だと保護者に紹介することにした。だが、授業を参観し、薦森さんと直接話せばきっと何の問題もないだろうと思っていた（実際、授業後の保護者の反応はよく、PTAの常任委員会でもよい授業だったと報告してくれたほどだ）。

学校には、授業の日程が決まった段階で、作家の薦森樹氏をゲストに迎えて、性教育の授業を授業参観としてやることを伝えた。すると校長さんから「少し話をした

い」と呼ばれた。「なぜ、この時期に」と聞かれたので、毎年この時期に、まとめの意味も含めて人権教育としての性教育をやっていること。公開して保護者に見てもらい、その後何らかの形で話し合いをしていること。今回違うのはゲストを呼ぶことだけであること。これらを説明すると、もっと何か言いたかったらしいが、すんなりと了解してくれた。第一関門通過。

だがその時、私は薦森さんを作家としか紹介しなかった。女性の格好をしていることを伝えて、余計な波紋を投げかけたくなかったのだ。結局、理解を得られるだろうと思った教頭さんに記事を見せ、校長さんには教頭さんからうまく伝えてもらうことにした（当日薦森さんに会った校長さんは、わざわざ挨拶に寄った薦森さんを避けるように帰ってしまった。「吃驚してしまった」と後で聞いたら言っていた。退職間近の校長さんをドキドキさせてしまいました）。

一応理解してくれた教頭さんだが、授業二日前の日曜日、突然電話をかけてきて、「本当に大丈夫なんでしょうか」と聞かれたときには、正直「まいったなあ」と思った。

T先生に相談すると、「大丈夫よ。くだらない心配よ。何かあったら一緒に闘うから」と励まされた。それでも何かできることはないかと考えた。正規の授業参観では、数人の父親の参加もあるが、今回も男性の視点から授業を点検して欲しいという想いもあって、二人の保護者に「ぜひ来て下さい」とお願いした。一人はPTA副会長という要職にもあり、授業に疑問を持った人の声がPTAに届いた場合、事実を知っていていればそうした疑問の声に対して説明もしてくださるだろうと期待した（しかし結果的には、そんな事態はなかったようだ）。

最後は、当日のスケジュールをスムーズに進行させるためのスタッフの問題だった。私にとっては、新しい段階の性教育の授業だったので、〃人間と性〃教育研究協議会（性教協）代表幹事でもあり旧友のO先生はじめ七〃八人の人に声をかけていた。また、薦森さんを取材したいということでTV関係者も来ることになっていた。授業のVTRや録音もしたかった。S先生とT先生と私の三人では、とても手が足りなかった。先日一緒に性教育の授業もやり、当日も参観してくれることになっていたY先生とT・I先生に、協議会の司会と録音を急遽お

願いた。VTRは、学級代表のお母さんをお願いした。そのほかの先生にも「見に来て下さい」と声をかけると、何人か参観してくれたばかりでなく、接待などいろいろと協力してくれた（本当に、この温かいバックアップ体制あってこそその成功だと思って感謝している）。

こうして何とか当日を迎えられたが、当日もたいへんだった。先に到着したTVクルーが、勝手に学校を撮りだして教頭さんが険しい顔で飛んできたり、授業中も、TVの取材の厚かましさに教頭さんはますます不機嫌になった。だが一応無事にその日は終わることができた。

その後、薦森さんを取材に来たTVが授業を番組に使いたいと言ってきた。保護者の了解を取ったり、教育委員会へ届けてもらったりと忙しい思いもした。

無事番組も放映され、やっとほっとしたところ。しかしこれも薦森さんに会ったその日に、「授業に呼びたい」と勝手に思い込まなかつたら、実現しなかつたかもしれない。いろいろと大変な思いもしたが、今は、いい勉強をしたと思っている。できることなら、『樹さん、学校に現る』なんていう題で、この授業の性教育絵本を作りたい。

授業に参加して

稲邑恭子

蕙森さんが小学校で性教育の授業に加
わると聞いて、きつと面白いことが起き
るに違いないと、出かけて行きました。

小学校二年生のクラス。担任の向原先
生は率直でからっとした語り口で、「女
も男も胎児のとき、最初は区別がなくて、
性器ができてから分かれるんだよ」とい

う話をします。性器の分化していく図を
黒板に貼りながら、男のペニスに対応す
るのはクリトリス、女にあるワギナは男
は閉じている（ないとは言わない、本来
あったのが閉じる）、男の陰囊は女の陰
唇と説明。ペニス対ワギナという説明に
慣れていた私は、あれっと思って、でも
不思議にすつと納得。ペニス対ワギナと
するから「性交」至上主義になってしま
うのよね。

それから色紙を取り出して、「男の色

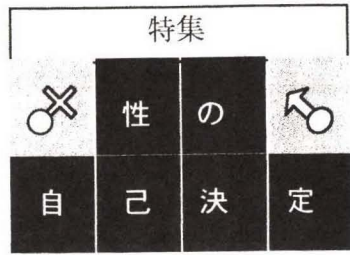
か、女の色か、どちらでもない色か」と
子どもたちに聞きながら黒板に貼ってい
きます。「男の色」はなくて「女の色」
がピンクだけだったのにまたびっくり。
次に、いろいろな服装を切り抜いた紙を
取り出して、また「男のものか、女のも
のか、どちらのものでもないか」尋ねま
す。これも女のものの特定されたのはス
カートだけ。

それから、先生のお友だちとして蕙森
さんが登場。後ろからの見学で、子ども
たちの表情が見えなかったのがかえすが
えすも残念。そのあとのお母さんたち
を前にしての蕙森さんの自己紹介がとて
も自然で、好感が持てました。

授業の後の性交協の先生たちとの反省
会で出た、「性自認がはっきりしないと、
子どものアイデンティティが揺らがない
のか」という質問（多分これは大多数の
大人にとっての究極の不安でしょう）に
対して、蕙森さんが黒板に図を描きなが

ら答えたこと——男でなければならぬ
という一つの選択にしがみついていると
不安になるけれど、どっちにもなれると
思うと、楽になって、かえって安定する
——は説得力がありました。

それまで私は、性差を含め「違い」を
見ないのは良くないのではないか、むし
ろ「違い」を認めることから出発すべき
ではないかなと思っていました。けれど、
違いは違いでも「白か黒か」という二者
択一を迫るのと、いっぱい色がある中で
違いを選ぶのでは話が違うんですね。
性についても、民族に関しても、「ア
イデンティティがはっきりしていないと
不安になる」と人は思い込みがちだけど、
「どっちに帰属するのはっきりせよ」
という迫り方は、かえって人を引き裂き、
不安に陥れるのではないか。これからは、
アイデンティティを多重化し、複合的に
していくことが、サバイバルの知恵にな
っていくのではないかと思ったのです。



◆インタビュー

性は聖なるもの

高橋 絵里 さん
(聞き手/坤 恵依子)



坤 私、高橋さんにお話を伺いたいと思っただけ、私自身がカウンセリングをしている中で、今まで何人かの性暴力の被害者に出会って、しかも、たいがい失敗してるとですね。どううまくいかないかという、最初から性暴力の被害者だということがわかっている人の場合、ある段階までは元気になるんだけど、どうもそこから先止まってしまおうというか、進まなくなってしまう。何か頑なに、そこからは上がること拒否しているように感じてしまうんです。私から見ると、いくらか軽減したとはいえ、まだひどい

鬱状態の中にいて、とても生きづらいだろうなと思えるんですけど……。

また、自分が性暴力の被害者だとはまらで思っていない人の場合もありますが、これがまた難しい。不安がものすごく強かったり、すごい怒りを持っていたりして、突然興奮して怒り出したり泣きわめいたり、ちょっと普通の状態ではないので、境界例かと思ってしまったこともあります。それまで出て来た話の内容と怒りや不安の強さがしっくり繋がらないんです。平たく言えば、「そんなことで」というのは、カウンセリングでは禁句

だけだ、「ここまでなるかな」という感じ。後で、実は性的虐待を受けていたということが分かったんですけど。

そんなことがあって、今までうまくいかなかった他の人も、ひよつとしたら、みな性暴力の被害者だったんじゃないかと思えてしまったり……。

それで、どうしたら、そういうことを思い出せるような雰囲気や場を作れるのか、どういう時にふっと思い出すのか、私に欠けているものは何なのか。そして、思い出した後のことですね。性暴力の被害者にどういうサポートができるのか。

カウンセリングだけでは無理じゃないかとは思っているんですけど。長くなってしまいましたけど、そんなことをお聞きしたくて……。

高橋 それはもうそういう問題にぶつかるのは無理のないことだと思いますよ。だって、最近でしよ、やつとサバイバーの問題が言われ出したのは。フェミニストセラピーだって、性暴力の被害者のサポートだの、エンパワーメントだのって言うようになったのは、ほんの三年くらい前からでしょ。ましては他のところなんてとてとても。

性のことって、とても言いづらい。なかなか言えないですよ。フェミニストカウンセラーだって、自分のセクシュアリティを閉じている人が多いし。

坤 その辺は後で伺いたいところですが、高橋さんが、カウンセリング関係のことをやり出したのは、どういうことで困って？

高橋 性的虐待が自分にあったということとは覚えていなかったんですけど、後遺症があったんです。

嫌なことがあると朝起き上がれなくて、ひどい時は一カ月も自宅にこもりつきりでした。グループワークを相当受けてきたんですが、「これ！」と言える効果的な治療が見つからなかった。森田ゆり訳の『誰にもいえなかった』（築地書館）を読んで、私のことが書いてあると思っただ。フェミニストカウンセリングにたどりついた時に、「ああ、やつと探していたものが見つかった」と嬉しかった。

坤 私は、記憶を消してしまうということも信じられないということもあるんですけど。幼児期の記憶ならともかく、小学校高学年や中学生の時の記憶でしょ。『記憶を消す子供たち』（草思社）はつい最近読んで、あまりにつらい記憶は消してしまえるという心理規制に感心したのですが、高橋さんも、ほんとに忘れていたのですか？

高橋 ほんとに忘れていたんです。
坤 どうやって思い出したんですか？

高橋 私はね、インナーチャイルドのワークシヨップで。それは、四日間、朝から晩まで缶詰になって、絵を描いたりと

か瞑想したりとかいろんなことやるんだけれど、その中で、セラピストから「目を閉じてお母さんのことを思い出して」と言われた。私は、「まず父のことからでないと話せない」と答えて、それで自分が性的虐待を受けたということを思い出したのです。

だけど、「これは、自分が死んでお墓の中まで持っていくこと、家の恥」だと思ったから、泣きながら、恥ずかしさで顔があげられなかった。

坤 思い出した後が大変でしょ？ それからどうやって癒していったんですか？

高橋 それはもういろんなことやった。ブリージングやリバーシング。瞑想やチャネリング、ロールプレイやCR、アトセラピー。でも「これが有効」という直観がなかった。それで、セクシュアリティのことを真剣にやりたかった。ほんとにこの問題を解決に導いてくれる人を必死で探していた。

あるワークシヨップで、セックスをした後、すごく汚された気持ちになると話したら、参加した女性の中で、「私もそ

うだ」という人がとても多かった。そうしたらトレーナーは、「セックスなんて電話と同じなんだよ」って言うのね。電話がリーンって鳴ったらハローって言うね、そういうふうな自然なコミュニケーションションなんだよって言うの。彼はイタリア系だからね。「いや、それはちがうよ」って思ったのと、「愛がすべて」だと、単純にセックスを解放のイメージだけでとらえていることに納得がいかなかった。男性は何を求めてセックスするのか、女性は何を求めてセックスするのか、その合意がなままセックスするのは、結局は女性が傷つき外傷体験を重ねてしまうことになると思う。それが彼にはやはり分からないんだと。フェミニスト的な視点は彼には欠けていた。

それはインナーチャイルドワークをやった男性のセラピストにも言えた。最初はよかった。発掘したときの彼は。対応もよかった。でも、二度目に、問題が深刻で、女性がいかに傷ついているかが、男性であるが故に分からない。彼はあまりにも強引だったし、傲慢でセラピスト

として自分が優秀だという思い上がりがあったから、過酷なセラピーを、ワークをやっちゃうわけね。それで却って外傷体験になってしまった。

どうということされたかっというかね、合宿形式の上級セミナーっていうのがあるんだけど、座布団をしいて、そこに寝ろっていうの。寝て、自分がセックスして気持ちよかった時のことを思い出してよがり声を出せて。

ひどいでしょ。笑っちゃうよね。でも、参加者は、こっちは必死だから。だけど、できないわけよ。セックスそのものに快感を覚えてイイワって思えないから来てるわけだし。ただ、「いやだっってことは言え」って言うの。でも、それが言えない。とてもそんな段階に来てない。

坤 いやだっってこと？

高橋 相手が影のように覆いかぶさって来たときのことを思い出して「いやだ」って言えって。それを今感じろと。それはいいと思うのね。ただ、私の気持ちから初級を受けてからまだ半年しか経ってないし、そこまで追いついていないわけ。

現実の生活にしても、仕事がフリーのコピライターだったから、フリーってすごく侵略されやすいのね。バックに何も無いわけだから、一人の女性が能力だけで売り込んでるわけだから男性にとっては格好の餌食でしょ。手なんか、おじさんに触られても、「しよがらないわねー」なんて我慢してるだけで、「いやよ」なんてとても言えない。

子供時代に「いや」と言えずに育つということは、性的に侵略されやすい人間を育てると思う。それ以前にも度々セクハラを受けていたから。

坤 で、いやだということも言えなかった。

高橋 言えたんだけど、とても弱々しくて。「どう思うの？」って言われた時に、「これは、えーと……だから……我慢しないと仕事を貰えなくなってしまうから、仕事にまつわるひとつのおまけとして……」くらいしか言えてなかったわけ。

そんな段階だから、自分に影が覆いかぶさって来たときのことを思い出すと、体が冷たくなってきて、もう真っ青に

なつてぶるぶる震えが来て、顔が上げられなかった。その時、参加者の一人が、「まあ、お芝居が上手ね〜」って言ったの。それが聞こえてしまつて、「こんなになつてゐるのになつてこと言うの!」とすごい怒りを感じて、出て来たものが出せないで止まつてしまふし、すごい大変なわけ、恥ずかしさ、恥辱と怒りと悲しさ……身を投げたいくらい恥ずかしかつた。崖から飛び降りようと思ふくらいで……。それを彼は何のフオーもしない。すごいことをやつてゐるといふ認識がないのよね。自分から最後に、もうたまたないから助けてくれ!とすがつたのは、カウンセリングなんかやつていない女性のスタッフ。その人がいてくれてよかつた。彼女に頼んでハグしてもらつて……。後でその女性が、セラピストに、「あなたは乾きかけたかさぶたを無理にはがそうとしてゐる」と言つたのを聞いて、解る人が一人でもいてくれてよかつたなど。そういう危険なことをやはり男性ではできないんじゃないかと思う。彼は豪語していたけど、自分がおかまバーに

行つた時に、ゲイの人たちが来て膝に座られ腰をなでまわされてゾツとした。それはだから感じる事ができるから、性暴力もわかるよという言い方をしていた。坤 それは違うよね。痛みじゃないよね。「いやだ」って言えるじゃない。

高橋 違うよね。

坤 子供が性暴力を受けていて、それに抵抗できなくて、それに耐えなくちやいけない屈辱感だとか恥辱感だとか、怒りだとか……。

高橋 その人と暮らさなくちやいけないのよ。両親なんて、子供にとつて世界の代表じゃない。「いや」だなんてとても言えない。捨てられたら生きていけないんだから。もつとつらくなるんだから。

坤 高橋さんが、性的虐待を受けたのはいくつ時からですか。

高橋 母親からは、一〇歳かな。精神的・身体的な虐待はもつと小さい時からありましたけど。母親自身も、未熟児で虐待されやすい環境に育つたと思うのね。多分おばあさんから虐待を受けていたんだと思う。人権感覚なんて皆無な家庭で、

何しろ長女が父親の白内障の手術費のために芸者に売られてくるくらいだから。自分の家族で銭形平次で出てくるようなことがごく近い世代であるんだから。母親も次は自分だという恐怖があつたと思うのね。そういう心理的問題を全部私にぶつけていたんだと思う。境界例みたいな人で……。その頃父と母は性生活がなくなつていて、そういうことを母は私に言うのね。

坤 お母さんの性的虐待つて?

高橋 一〇歳くらいになると、胸が膨らんでくるじゃない。叔父さんが来ると、「見せてあげなさい」って言うの。

坤 えつ、何のために?

高橋 おもしろがつて。ひやかし。ひどいでしょ?

坤 その頃つて、親にだつて隠しますよね。

高橋 そうでしょ。でも、逆らえなかつたの。

父親から性的虐待を受けたのは十三歳の時。それ以外にも、入浴中に湯加減をみるという口実で急に浴室に入つてこら

れたこともあるし、夜中急に起き上がった私の頬に唾液の残るキスをしてきたこともある。また、別の夜に、胸の膨らみを触られた。されてる間は寝たふりしていた。いまだに後遺症がある。父の視線が胸にくると「あつまた！」ってビクツとする。私胸が小さいでしょ。自分で成長を止めたんだと思う。よくあるでしょ、思春期にサラシ巻きたいって、ああいうのも何かあるんじゃないかな。

そういう家庭に育ったから、CAPでも、「口と胸と性器とお尻は、たとえ親でも触らしちゃダメなんだよ」って強調している。男の人って、性的虐待をしているという気がなくても、冗談みたいにされてさわるでしょ。そして、されてるほうはどんな気持ちかかってはまるで考えない。

坤 思春期になると、父親の目線だけでも気持ち悪いですよね。ちよつと触れても「やめてよ！」って嫌がるじゃないですか。

高橋 健康な自我が育っている子供は、「なにやってんのよお父さん、やめて

よ！」って言える。でも、親には絶対服従の家だから、言えなかった。

坤 お母さんにも、「お父さんがこんなことした」って言えなかった？ 気がつかなかったんでしょうか。

高橋 雑誌で「中2コース」とかあるじゃないですか。あれの相談室に手紙を書いたのね。そしたら速達が来て、それを母が見た形跡があったの。だから、分かってないはずはない。

大人になってから、親とは四回対決したの。こんなに私の人生狂わせてきて、ひどいことしてきたというひとかけらの気づきさえ、罪悪感さえない。でも、結局分からないんだなと。頭では分かっても、ほんとうにはわかってもらえない。私の中にも、もう七〇過ぎた人たちを泣かせたくないという気持ちもあるし、もういいかと……。

坤 カウンセラーにしてほしいことは？

高橋 いま、教育分析を受けているんですけど、まず初めに、カウンセラー自身も自己開示（カウンセラー自身が自分を語ること）をしてほしいって、お願いし

たの。カウンセラーが泣くなんて論外という考え方があるけど、私は違うと思う。カナダの最先端では、カウンセラーが手をとって一緒に泣くんですって。私も一緒に泣いてくれる人を探してきた。「どんなにつらかったでしょうか。私がいもそうだったら耐えられないわ」そう言ってくれる証人を探してきた。

それから、性暴力の被害者のカウンセリングをする場合、カウンセラー自身が、性暴力専門のワークシヨップを受けることだと思ふ。セクシュアリティのことを重点的にやらないと。どんなことをやるのかというと、たとえば性器で息をのさいと、か、粘土で性器を作ったりとか、暗闇で動物になってダンスをするとか……。とにかく、カウンセラー自身が自分のセクシュアリティを開いていかなないと、クライアントと一緒に悶え苦しむことができない。性暴力の経験がなくても、自分の子供時代の痛みを再体験することかなり近づけると思ふ。

坤 私は自分では、性に関しては解放されてると思ってきたんですけど、案外違

うのかもかもしれないと最近思えてきたんです。頭ではそうでも、生身の性に対してはどうなのかなど。あんまりどろどろした感じとか悶え苦しむなんてないもの。そういうところがサバイバーのカウンセリングをするのにはネックなのかもしれない。

サバイバーがなぜ性にこだわるのかという点では、穂積純さんの『よみがえる魂』（高文研）を読んで、やっと合点がいったんです。「性Ⅱ生Ⅱ聖」だとあつたでしょ。そうなのか、子供の時代に性を犯されるといことは、聖域（魂）を犯されてしまうことなんだと。

性暴力の被害者を樹木に譬えていますよね。まだ若木のうちに打ち込まれた楔を残したまま成長する樹は曲がったまま成長するしかなくて、成長するにしたがつてよけい傾いていってしまうものだと。

普通は、子供の時の心の傷は大人になるにしたがつてだんだん癒えていくものなのに、性暴力の被害者がそれとは反対の過程を歩んで、成長するにつれていろいろな問題が出現したり、うつ状態がひ

どくなったりするのは、生きる力と自尊心を根こそぎにされてしまうからなのですね。

高橋 だから、性暴力の被害者には徹底した母親役が必要なんです。そこまでやらないと立ち直れない。一人の人間にそこまで要求するのは難しい面もあるけれど、でもできる人はいると思う。サバイバーにしてもそうじゃないクライアントにしても、カウンセラーとクライアントの出会いって縁だと思う。縁があつたらぜひサバイバーのカウンセリングをやってください。

カウンセリングだけでは十分ではなくて、自助グループも絶対必要です。

坤 それにしても、どうしてこんなことになってしまったんでしょうね。昔からあつたけど表面化しなかっただけなのか、性暴力が増えているのか。

高橋 もともと、人間ってのは野蛮人だと思う。ローマ時代には、親が子を売る法律があつたんだから。日本だって戦前まで、子供は親の所有物で殺人以外は何をして咎められることはなかった。

ここ数年間は虐待が取り沙汰されて、やつとここまで来てて、でも、まだまだ野蛮ですよな。

坤 そう思うと、特殊なことじゃない、自分が悪いわけではないと思える……。

高橋 そういうひどい目に遭つても生きのびてきたという人間の生命力に感動するのね。私がいまやっている活動や運動も意味があることなんだと思っています。

☆高橋裕里 グループCAPの設立者。一〇月からサバイバーのためのカウンセリングも始める。

☆CAP (Child Assault Prevention) とは、子供に対するあらゆる暴力を防ぐ為のプログラム。

約二〇年前に米・オハイオ州で開発され、二年前日本に導入された。現在、九カ国で活動している。いじめ、誘拐、性的虐待から身を守る為に、子供達自身の力で「いや」と主張して、その場から「逃げて」誰かに「相談」できるように、ロールプレーを使いながら学習できる。米では、公立学校の八割が授業としてとりいれている。

☆カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学

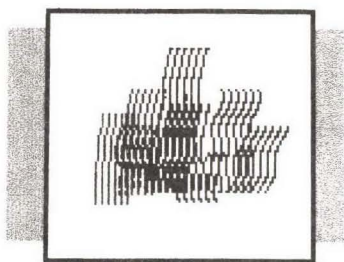
性的虐待の治療に関する研修旅行参加者募集中

八月二十三日―八月三十一日

☆CAPの講演、研修会についてはお問い合わせください。☎03(33369)8540。

神戸から③

神戸YWCA救援センター
前田圭子



「このところ、毎週末になると空き室に人が入ってはるんですわ。市からは何の連絡もないから、もうパニック状態です」と自治会長さんは嘆いた。

先日、仮設の募場と呼ばれるR仮設に行った。湿地のような谷を埋め立てた広大な土地に全六百戸、内三百世帯が入居していて、半分は空き状態が続

いていた。それもそのはず、神戸の中心地からJRで約三十分、駅を降りてバス停のある国道まで歩いて十分あまり、バスに乗って約二五分、しかも朝夕以外は一時間に一〜二本。最寄りのバス停を下車、また徒歩で十五分。まわりは広大なため池と耕作地、農家が数軒。

「まわり、何にもないでしょう。公衆電話まで歩いて十分はかかります。病院も遠いから、週に一回は救急車騒ぎになるんですわ。仮設敷地内に公衆電話がついたのは先週ですよ」

耳を疑った。だって、この仮設ができたのは去年の七月末。電話を持っていない人は、約八カ月もこの陸の孤島でがまんしていたのだ。

「こんな不便な仮設が、いまや大はやりです。県外の公営住宅に避難してた人がいはるでしょう。期限切れで神戸

に戻ってこようにも家ないですわな。神戸市はどうやら仮設住宅は「こしか空いてないゆうてるらしいんですよ」

現在、神戸市では市街地も含めて五千八百戸の仮設住宅が空いている。なぜ、こんな不便なところに避難者を押し込めたがるのか。

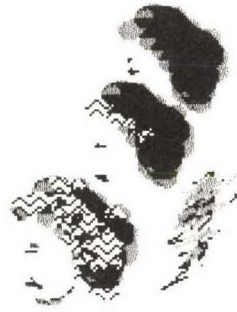
帰って、テレビをつけると芦屋市の仮設住宅の取り壊しがニュースになっていた。後日、街で囁かれたのは、あの仮設に住んでいた人は、ほとんどがほかの仮設に移動したということだった。ああ、そういうことか。市街地の仮設はなるべく早く立ち退かせ、不便な仮設に無理矢理移動させる気やな。

ところで、R仮設の自治会長さんは任期満了になった。しかし、新たな立候補者がいないので、苦渋の決断で再度、会長となった。彼の震災による失業保険は先月切れた。

女が歳をとるといふこと

3

木村 栄



日照の乏しい我が家のベランダにも春は来る。今年が一番乗りはハナニラだった。三年ほど前、一株貰って植えたのが、年々増えて鉢に溢れるように咲く。

若い頃は、花の名前には全く関心がなかった。が、何時だったか腰痛で鍼治療に通う途中の路地で、ピンと背筋を伸ばしたみずみずしい星型の白い花が花卉に薄紫の筋を透かして咲いているのを見て、不思議に元気づけられ、ふいに花の名前を知りたいと思った。ハナニラとの最初の出会である。

それからまたしばらく、花どころではない歳月が流れ、本当に花の名前に心惹かれるようになったのは、子どもが成人し、暮らしの苦勞ににくきりがついて、ようやく少し心にゆとりができた頃だった。脆弱な体に合わせて少しずつ歩を伸ばしながら山歩きに誘い出してくれた友の感化で、可憐な野山の花々の一つひとつに名前があることに驚き、夢中になり、片端から覚えた。名を知ることと愛着が深まり、まるで友達のように人に自慢した。それは草花から木の花、花から実へと広がった。

同じ樹木でも花と実では別人のような姿を見せてくれる。よく晴れた秋の一日、友と散歩していて、ごつごつと節くれだつた房状の青いさやにひと刷毛の紅をはいた奇妙な実を見つけた。はて、と首をひねり、春にはこの辺りにこぶしの花が咲いていた筈だがと思い当たって、あと顔を見合わせたのは、その実が指を並べた拳のように見えたからである。こぶしの名の由来は花ではなく実だったのだ。そんな発見の面白さに釣られて歩いているうちに、季節の自然に身を置くことで、暮らしの折々にささくれだった心が柔らかく癒されていくのを感じるようになった。

限りある命を知る年頃になって、繰り返される自然の営みに惹かれるのは、土に帰ることで永遠の命の循環に連なる心準備なのだろうか。ただ一人、生き物の、或いは植物と動物の命の連鎖から切り離されてしまったヒトの、遙かな望郷の思いなのかも知れないと思うと、何やら広々とした気分になる。

自宅から街に出てみると、巷ではバリアフリーという潮流を実感することが出来る。この言葉自体、バリア（障害となるもの）を取り除き、誰もが生活しやすくするための合言葉となりつつある。

昨年から今年にかけて駅のバリアフリーの調査を某総研の依頼で担当した。駅というのですぐにピンと来るのは階段にスロープを付けたり、エレベーターを付けたりとといったことであるが、今回は主に情報面でのバリアフリーということであった。聴覚障害者（聾者）にとっては、乗車中に急に止まれば、故障で止まったのか、ただの一旦停止なのか判らず、精神的負担が増す。視覚障害者にとっては点字ブロックがあるにもかかわらずホームからの転落事故が今も起きている。これらは確かに指摘していかねばならない点である。が、同時に思うことは、そうした不完全な設備を前に各人が工夫

うるう 閩都市建設計画

☆3

をして対応しているという事実である。

例えば、私の友人は光の明暗が判るくらいの視力であるが、点字ブロックだけを頼らずに、ホームの天井に水平に沿って付いている蛍光灯を頼りに歩く時が多いという。また、ある全盲の友人は、急いで電車で飛び乗って何両目に乗ったかが判らない時、おおよその位置を知るためには踏切があつて、その音が聞こえたら心の中で時を数え始めるそうなのだ。そして、止まるまでの時間が長ければ先頭、短ければ後方に乗っていたことになる。前よりに乗ったことが判れば、下車してから出口へ向かう階段の方向が自然と判ってウロウロせずに済むというわけだ。

もちろん、こういう類のことは、当人にしつこく、しつこく聞かないと出てこない類の話ではある。なぜならば、彼らにとつては、工夫をしていることを言っ

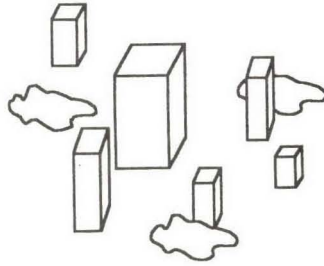
てしまうことで、逆に不利益を被るおそれもあるからである。「工夫しているなら、あえてお金を掛けてまで、駅の配慮をする必要はない」という口実を駅側に与えてしまうからだ。

もちろん、工夫はあくまで工夫にしすぎない。先のホームの上の蛍光灯の件についても、別に盲人歩行的のために意識的に付けたものではないので、必ずしもいつも平行に付いているとは限らない。

頼りすぎたためにかえって、駅のホームでこわい目にあうこともあるわけである。だからもちろんのこと、駅側の配慮が必要であることには変わりない。

だが、それでもなお、こういった工夫の話が駅側が知ることは必要だと思う。

駅の近くで踏切音を聞いた瞬間、今までなら聞き流していた駅員が、これからはその音と共に視覚障害者への配慮を考えるきっかけになるかも知れないわけであ



坂部明浩

る。蛍光灯の工夫を知ること、今まで足元にしか注意を促す方法がなかったと思われていた固定観念をくつがえす契機になるかも知れないのである。

ハード先行のバリアフリーではなく、相手を知ることから始まるソフト先行のバリアフリーこそが大切ではないか？

駅によっては視覚障害者に配慮した新品の券売機が登場している一方で、そのほんの数メートル先の所の工事現場に、何も危険を知らせる音声情報が流れていない、という駅も見受けられた。物にはかりに目がいって、相手をちゃんと「見て」いない証拠である。

利用者や障害者からの声が上がると、無視をするか、無条件に慌てて改善するという両極端の場合が多い。そうではなく、ちゃんと相手を知ることから始めること——これは障害者対策の問題ではなく、コミュニケーションの問題である。



変な子じゃないよね ③

滝野澤直子


どうして、人って競争するのが好きなんだろうね。「みんな仲良く、おおらかに」なんて言いながら、小学校に入ったときには、もはや私にはライバルがいた。

「Mちゃんとは、ライバルだものね」

おばあちゃんが口癖のように言っていた。成績が良くて、はきはきと、お行儀のいいMちゃん。彼女と比べられることは、小さな私の自尊心をくすぐった。大人の世界は結構複雑なようで、Mちゃんとの比較は当人同士の域を越え、親の職業や収入などというまるで不毛な背比べにまで発展して、

「あそこのお母さんはパートだけど、うちのお母さんは公務員だから」と、ここまで来ると、さすがにうんざりだった。

Mちゃんとは、本当はライバルなんかじゃなくて、話の通じる友だちになりたかった。シャンと伸びた背筋を後ろの席から見ても、まねをして背中を伸ばしてみたりした。だけどもMちゃんのニッコリかわい丸顔の前には、いつも「ライバル」という大きな文字がちらついていて、本当に仲良くなるのを邪魔していた。そんな言葉はとってもうっとうしかったのに、「バッカみたい」と無視することもできなかった。大人の用意したそ





の場所で頭を撫でてもらえることが、うれしかったからね。

教室には二枚のグラフが貼ってあった。毎日テストする、漢字ドリルと計算ドリルの成績表。四つ切り大の方眼紙の横軸にはクラス全員の名前が書かれてあって、合格点をとると一つずつ丸いシールを貼ってもらえる。シールの山の高いほど、みんなから感心されるといふ露骨なものだ。

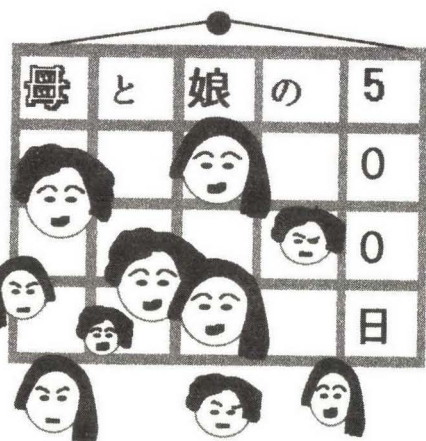
いつも山のとっぺんにいた私は、チャホヤされる心地よさを知った。またMちゃんに競り勝っていることが得意でならなかった。

ある日、夜になってからランドセルを開けると、入っているはずの漢字ドリルがない。教室の机の横にぶらさげたまんま、忘れてきちゃったんだ。どうしよう……。私はパニックになった。明日のテストのところを覚えていかなければ、合格しない。一回も欠かさず貼ってもらっていたシールなのに、明日でできなかつたらMちゃんに負けてしまう。

一回くらいダメでもいいって。そう言うお母さんに、真っ赤な顔でじだんだを踏んで、泣いてわめいて、夜道を一緒に取り行ってもらった。次の日も、当然のごとくグラフにシールは貼られたけれど、もはやそれはうれしいものではなく、私を追い立てるものに変わっていた。

ほめられたい。さすがね、と言われたい。たいして弾けもしなかったピアノを、さもできるふりをして、クラスのオルガン係を引き受けた。聞いたこともない言葉に、物知り顔で頷いた。周りのみんなをひきつけようとして精一杯に張っていた見栄が、いつか自分をひとりぼっちにしてしまうなんて思いもしなかった。





森津純子 ②

母の病気がかなり進行した大腸ガンであると分かったのは、一昨年の夏のことであった。嘔吐と腹痛という典型的な腸閉塞症状で病気は見つかった。

私は母に、「腸にコブがあって狭くなり、そのため便が詰まりかけている。ガンの可能性が八割以上だろう。手術しないと、腸に穴があいて死んでしまうかもしれない」と告げた。俗に言う「やわらかな告知」である。

母は言った。

「いまは食事にさえ気をつけていれば、何の痛みもなければ不都合もないのよ。手術なんて嫌！ 手術しないで、生活を改善することで、病気を治したいの！」

「でも、そのやり方で治る確率は少ないんだよ。手術の方が確実に治るんだから」

「でも、私の体よ！ 痛くもかゆくもないのに、手術って言われて、『はい』なんて簡単に納得できるもんですか！ 絶対に嫌！ 手術するくらいなら、死んだ方がまし！」

「そう言うけど、この先、腸閉塞になって腸が破れたらすごく痛いし、そうなるから手術したんじゃ、手遅れなんだよ。後で、『ああ、あの時、言うことを聞いていれば……』って思っても遅いんだから……。それに、ガンの可能性の方が強いんだから、ほっとくと死んじゃうかもしれないのよ！」

「それならそれで、死ぬからいいのよ！ 私の人生なんだから、どうしようと私の勝手でしょう?! とにかく、手術は嫌！」

母の口調から、「どうしても病院に入りたくないこと」、そして「ガンと確定されることを恐れていること」が感じ取れた。結局、私たち家族は、手術はせず、完全な告知もしないことに決めた。

しかし、そう決めた時、同僚たちからの風当たりは強いなどと言うものではなかった。

「なに馬鹿なことを言ってるんだ！ お前、医者だろう？ だったら、この先、どんなことが起こる可能性があるのか、分かっているだろう？ なら、どうして、最善の策を取らないっ！ 本当に親が心配なら、引きずってでも病院へ連れて行って、最善の治療を受けさせるのが筋ってものだろうか？ なが、価値観だ！ お前は、宗教家じゃないんだぞ！ もっと医者としての自覚を持て！ 自覚を！」

同僚や先輩の医師たちに怒鳴られながら、心は屈辱感でいっぱいだった。

「元外科医であり、今はホスピス医でもある私が、母一人、説得することができなかった。医師として、最善の道を取らず、完璧な告知もできなかった。なんて情けない不甲斐ない医師だろう。これじゃ、これからの私自身の職歴や名誉にも影響するんじゃないだろうか」

そう思うと同時に、一方で、反発と疑問の心もむくむくと大きくなっていった。

「普通の人なら、ここで何の疑問も感じずに強制的に病院へ連れて行かれるわけだ。そして、否応なくいろいろな検査をされ、『医師が最高と考える医療』を受けることにな

る。そこにはたいがい、一分の自分の意志の入る隙間もない。医師の人生ではなく、その人自身の人生なのに、本当にこれでいいのだろうか？ 確かに、母の言うことは、屁理屈かもしれない。最善の策ではないかもしれない。まっとうな人が歩む道ではないかもしれない。でも、自分の人生を自分で選んで何が悪いのだろうか。私だって、母のような大腸ガンなら手術を受けるかもしれないが、肝ガン、膵ガン、心筋梗塞だったら手術をしないでそのまま死にたい。この考え方だって、医者から見れば、おかしいと言われるだろう。母だって同じじゃないか。

そういえば、昔、『病衣をどうしても着たくない』って言った人がいたっけ。『病院の規則ですから』って言われて、その人は『病気になったって僕は僕だ』って頑張った。病気をしたって、自分は自分だって言えないって変じゃないの？ 母のような変わった価値観を受け入れる医者が一人くらいいたっていいんじゃないかしら」

そう思いながらも、心のどこかでずっと「私が医者じゃなかったら、外科医のままだったら、あるいはホスピスに勤めなかったら、母の人生は変わっていたのではないだろうか」と自責の念で、何度も何度も自問自答する日々が続いたのであった。

——この家の写真（三九頁・上）を見てどう思いますか？
 どんなふうに感じますか？ あなたがイメージすることを
 何でも自由に言ってみてください。

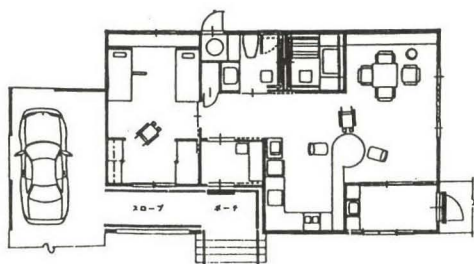
「小さい家じゃない？ いや、大きいよ。和風かな。かっ
 こいい。誰のうちのなの？ 門がない」

——そう、その調子。どんどん出しちゃおう。
 「プレハブ。一階建て。落ち着いた感じ。丈夫そう。新し
 い。ガレージが広い。……etc」

——じゃあ、今度は家の中に入ってみようか。これ（三九
 頁・下）は、台所の方からリビングを見た写真。今度はど
 う？（途中で間取り図も見せるといい）



金沢市バリアフリーモデルハウス平面図



バリアフリーハウス とは

PART 1

林 子
 小林 由佳
 浅井 由利

金沢市昭和町21-7 ☎ (0762) 32-4245

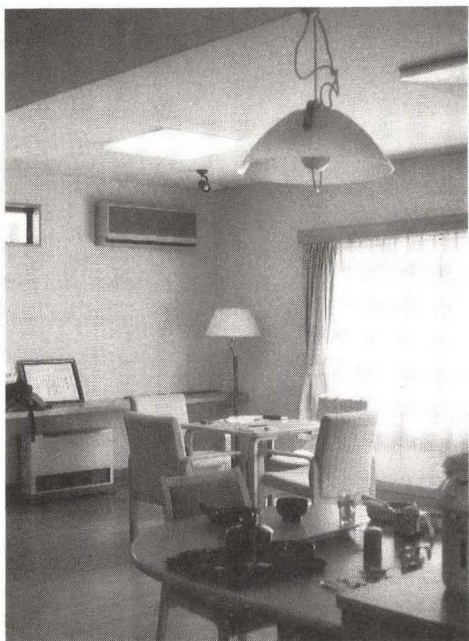
公開時間 9:30~16:30 (毎週水曜から日曜まで)

木造平屋建 118.4m² (35.8坪)

住宅部分 87.5m² 車庫・ポーチ30.9m²



「広い。陽が差して明るい。窓が大きい。フローリング。ベージュ系。天井が高い。すっきりしている。ゆったりできそう。壁が白い。廊下が広い。トイレが個室じゃない。ドアがない。部屋が細かく分かれていない」
——そうだね。じっと見ているといろんなことを感じるよね。ところで、これは誰の家かな。どんな人が住んでいるのかな？



実はこれ、金沢市にあるバリアフリーハウスなんです。バリアフリーとは、バリア（障壁）を取り除くという意味で、お年寄りも若者も、からだに障害がある人もない人も、

誰もが安心して生涯にわたって暮らせる住まいが、このパリアフリー住宅なのです。建物の設計・設備機器の配置・家具や道具の選び方などを丁寧に考えて整えられています。――それじゃあ、実際にどんな工夫がされているのか見てみよう（写真を見せながら、使いやすい・住みやすいとはどういうことを考えてゆく）。



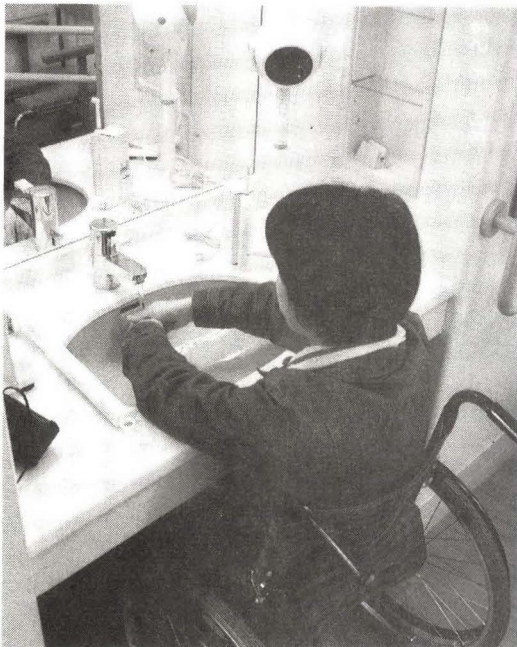
台所

車椅子でも、椅子に座ってでもできるよう、低め（七十八センチ）に設定。電動式のコンロのほうが炎が上がりやすいので安心。点火もしやすい。収納は、開き戸より

引き出しの方が（キャスターがついているため）楽にできる。取っ手は握りが大きいものを。

洗面所

洗面台の下に空間を設けたため、腰掛けたままの姿勢で洗面・洗髪ができ、車椅子の人も使いやすい。鏡は立っていても座っていても見えやすいよう、大きめで幅広いものを使用。蛇口はシングルレバー式。コンセントは手の届く範囲に。



PART1まとめ

高齢社会に突入し、我々も住居の分野で福祉住宅や機器についての授業を行ってきた。だが、これまでの展開だと、「さあ、今から福祉住宅の授業をするぞ」という雰囲気なのか、既存の住宅に見られる室内のあちこちの不備な点を列挙し、改造・改築の様子を例示する、という流れが多かったように思う。しかしこのことで、「同居人に高齢者や障害者がいて、初めて、住居の問題が浮き上がる」ような錯覚を与えてしまっているのではないかと思えてきた。

理想の住居として求められているのは、「誰もが安心して快適に暮らせる家」であって、「特別な人のためにあつらえた家」ではないはずだ。

実際、この家に入ると、「住む」ことに關してはより配慮、工夫している様子が端々にうかがえるものの、異質な雰囲気は全くない。身構えたような造りではなく、住宅メーカーのカタログによくある身近な材料で十分まかなえているし、建築費も一般の注文住宅と比べて高くつくわけではないという。

そういう目であらためて見回すと、なるほど大金を払っ

て特別注文したようなものはないのでは、と思える。

家具にしても、日用品についても、同じことがいえる。我々が普段の買い物をするときに行っているように、「その製品が必要かどうか、使いやすいか、好みにあっているか、機能はどうか……」といった選択や比較をそのまま延長して、「住まい」について吟味した、とても言おうか。

このことを生徒に理解させるためには、この家がバリアフリーハウスであることを知らせない、つまり、何の先入観もないままにこの住宅の印象を語らせる方が、「特別ではない」という意識を持ちやすいのではないかと考えた。

そのために、今回はまず最初に写真を見て、自由な発想を促す展開をとってみた。グループごとにその印象をまとめ、発表しあうと、さまざまな意見が聞けて面白い（この手法については、『We』九五年一〇月号の家庭科玉手箱でも紹介した）。それを膨らませて、住宅問題や住環境を考える方向に進めてもよいと思う。

次回は、ここからもう少し展開してみたいと思う。

というわけで、詳しい資料の紹介や（我々が撮影した素人写真ですが）写真キット販売のお知らせを含めて、次号に続きます。

（まとめ・林咲子）

学校包人

家庭科の森学園

一日体験入学レポート

寺本 勉

連休の真っ最中の五月三日、ドーンセンターは、時ならぬ「学校」に変身し、にぎやかな話し声に包まれました。学校包人「家庭科の森学園」の一日体験入学です。集まったのは、老若男女一〇〇名を越える「生徒」たち。司会者は、教頭を務める南野容子さん。「従来の家庭科教育にとらわれることなく、自由な発想で遊び心を刺激して、家庭科をより豊かな男女共修、男女共教の場にしたくて開校しました」と入江一恵園長。

1 限目

早速、1限目「着る、つける、纏うで世界が広がる」の授業へ。担当は、内山裕子さん、芦谷薫さんのお二人の「アバウトシスターズ」。まず「まる、さんかく、しかく」の形をしたシーツ型衣装を会場にたくさん持ち込んで、参加者実際に着てもらいましたが、「さんかく」を着ることになったモデルは悪戦苦闘（実は「おにぎり型パンツ」）。続いて各テーブルに配られた一枚のシーツ型の服をそれぞれ着付ける生徒参加の授業。着付けが終わると、モデル全員が壇上に上がっての壮麗なファッションショー。

2 限目

続く2限目は、「屋台村通信」でお馴染みの「デイベート和尚・吉田清彦先生だあ！」の授業。「夫婦別姓をするか、しないか？」がテーマに。建前論

ではなく、自分はどうかで「する、したい」「しない、できない」「どちらとも決めかねている」の三グループに分かれ、座席も変更していいよいよデイベートの開始です。時間の関係で、議論を深められませんが、締めくくるとの吉田さんの「デイベートを面白くするコツ」には納得。それは、一、テーマを生徒に押付けず、いくつか用意し選ばせる。二、一般論で喋らせない。「私は……」という形で自由に意見を言ってもらおう。三、結論を教師が誘導したり、押し付けたりしない、教師の持論に導くためなのであれば、しないほうがよい、の三点で、ついつい教師が陥りがちな問題を鋭くついたものでした。

3 限目

休憩時間も、会場に展示されたパネルの紹介があるなど、休みなしという

感じて3限目にすみました。各テーブルにはお茶と郷土料理が運ばれ「生徒」たちも待ち切れない様子。入江園長みずからが担当した「食生活探険、いろはにほしいなうまいもん、郷土料理は産地直送?!」では、長野のいなご佃煮など、一〇種類もの郷土料理の作り方紹介がおこなわれましたが、各テーブルでは、壇上でレシピを解説する料理人(?)もそっちのけ。「調理実習に使えるそう」、「今晚のおかずに……」の声ばかり。

4 限目

4限目は、「ワイワイガヤガヤから見えてくる?」。〃気まぐれシスターズ〃こと、林咲子さん、小林由佳さんによるワークシヨップ。子どもにとって必要なものは何か、何を省けるか、各テーブルで侃々諤々の議論が展開。「子ども部屋」を省くかで父娘の意見

が分れる場面も。小林さんらによれば、「開発教育」のセミナーから学んできた授業形式。先生が前で喋って、それを写して、覚えるだけという授業形態ではなく、生徒たちが実際に動く参加型の授業をしようと思つてとのこと。コミュニケーションの過程を大事にして、違う意見を持っている人がいることを理解してもらおうのが大事という点で、二限目のデイベート授業とも通じるものがありそうです。

5 限目

最後の5限目は、「フェンスを越えて」の小平陽一さんのお話。「家庭科を教え始めて一年」の率直な感想を中心に話して下さいました。同僚の女性教師から「家庭科どう?」と聞かれて、「悩んでいる」と答えると「あなたがこの学校で家庭科を教えているだけで充分よ」と言われたという体験談。

「家庭科をやって、柔軟になった、自分に素直になった、自分がすぐ変わると思う」との実感を話されてとても印象的でした。

最後に、入江園長が「今日は一日体験入学だが、今後の継続についてはみなさんのアンケートを参考にして考えていきたい」と今後のさらなる出会いを予感させるようなまとめ。参加者は、後片づけもみんなできて、部屋を変えて「学生証」の裏に「修了」のゴム印を押してもらい、なんだか嬉しそう。

夜間部の「いろいろつくって食べる授業」(顧問・西本和代さん)にも思い思いに参加し、とても楽しく、有意義な一日を終えました。

また、ぜひ開校してほしい、今後の企画が楽しみな「家庭科の森学園」一日体験入学でした。

(寺本勉 家庭科教員をめざす男の会)

◆埼玉発（お磯部）

二〇年の運動を経てその目的であった男女必修家庭科の制度化が実現して二年目のこの春、「家庭科の男女共修をすすめる会」は最後の集会（四月六日）を開いた。この運動の発起人であった故市川房枝さんゆかりの婦選会館で、市川さんらゆかりの人や活動の写真も展示され、参加者は約一四〇人。用意した資料が足りなくなるほどだった。

さまざまな立場から「家庭科を男女で学ぶ制度に」という一点で協力して取り組んだ市民運動を続けてきた方々の話には重みがある。「家庭科とともに共修運動とともに生きてきたなかで、一番変わったのは自分自身」「家庭科を学んだ男女が職場や日本を変えていく力になるという希望と期待」「戦前の女子教育にピリオドを打たせた」などが語られた。しかし「共修運動は成功したが教育としての家庭科はまだだ」「学校や授業の風景が変わって、第一歩の共修家庭科の授業は快いしかし学校に共修が根づくにはまだまだ課題がいっぱい」という見逃せない発言も。

会は、資料整理の一年を残して閉じる予定。この運動の成果は何か、どんな運動につなげていく

● ● ● 報 情 科 庭 家 学 共

か、未来への展望を持たせるものにしたいと集会のタイトルは「家庭科共修で日本が変わる！」とした。遠くは北海道、そして関西方面からも多数の参加があり、男女平等教育や家庭科への思い、教育の在り方など、会場の発言にも熱がこもった。夜の交流会では、日弁連の「高等学校家庭科の女子のみ必修についての意見書」が出される過程で、「男女とも必修」の提言を入れることに抵抗があった男性弁護士たちに対して、故井田恵子さんの強い信念があったからこそ提言が明記されたという興味深い話を聞くことができた。

私も家庭科教師になって二三年目。「日本を変える」という元気をもらった集会だった。

◆東京発（お安田）

中央教育審議会第一小委員会（座長・河野重男 東京家政学院大学長）は、三月二一日の総会に中間報告を出し、第一次答申に向けて審議を重ねることになった。完全学校五日制実施のお墨付きを与えると同時に、それを踏まえて学校・家庭・地域社会にまたがる教育の再編成を促すのが、答申の中心テーマ。中間報告は、教育内容の重点化や厳選を打ち出し、具体的な教科をあげた。重点化

では、十二項目、厳選では七項目の視点を例示。

重点化については、①国語を尊重する態度 ②数理的な考察と論理的な思考力 ③民主的の社会の一員としての基本的な知識と態度——などのほか、「(g)家庭生活や社会生活の意義や向上改善のために必要な基本的知識、技術の習得、職業や家庭生活に関する主体的、実践的な態度を育てること」という記述も。厳選については、①歴史の時代ごとの詳細な文化史(中学歴史)、動物の詳細な器官名や消化酵素名(中学理科)など単なる暗記物 ②古典での文語文法(中学国語)、実際にはほとんど使われていない関係代名詞や不定詞の用法(中学英語)をはじめとした行き過ぎた内容など——をあげている。

教科の再編・統合も早急に検討すべきだとし、教育課程審議会の下に常設の委員会を設置、カリキュラム研究も併せて推進するよう求めている。

〔「内外教育」1996/4/2、4/5、4/9号より〕

◆東京発 (by 芦谷)

二・三月号本欄でお知らせした全国普通科高等学校長会「高等学校基本問題検討特別委員会」の「新しい高校像」の家庭科に対する言及について、

知りたい・知らせたい

東京高等学校家庭科教育研究会(会長・岩崎芳敬 都立富士高等学校長)は「家庭科の必修単位に関する意見」(平成八年三月一八日付)を同委員会に出した。

他の道府県ではどのような状況でしょうか？

お聞かせください

〈これは使えそう・これおもしろいかもコーナー〉
当事者の立場からエイズ・同性愛についての出前講演をしている「すこたん企画」(〒273 千葉 県船橋市夏見3-8-13 TEL&FAX 0474-26-2315)。
築瀬竜太さんは九四年九月にパートナー伊藤悟さんとともに、同性愛に対する正しい知識の普及と情報の提供を目指すため「すこたん企画」を設立。築瀬さん、伊藤さんのコンビで、講演や執筆活動、そして大石敏寛さんの『セカンド・カミングアウト』(朝日出版社)をプロデュース。

九五年から学校への出前講演も始め、「新しい家庭や関係性のあり方、エイズ、性などのテーマで授業をされる際、私たちに声をかけていただき、講演あるいは特別授業といった形で先生方や生徒さん達と一緒に新しいライフスタイルを考えていければ幸いです」と呼びかけている。

授業風景



がかわる



いが
かわる



「買春」をめぐって 1

東京都立稲城高等学校

● 蔵本佳子

女と男の家庭科新時代

発表授業のスタート

どんなドラマが見られるのか、まさに遊々ゆうゆうわくわく感々気分で、二年生の家庭科一般しめくりの、一人五分間の発表授業が二月二日よりスタート。ホームプロジェクトの発表というよりも、青年の主張か肝だめしか、はたまたうさばらしかといった風景。直前に楽しいスキー修学旅行をはさんでいましたから、レポートA（発表内容をまとめたB5一枚のもの）を作成するための時間を十分とることができず、無謀といえは無謀なのです……。

学年全体の様子を見ると、昨年よりも読解力、作文力の

点でレベルダウンが予想されましたが、文字の上では推し量れない表現力、コミュニケーション力が、家庭科で開発すべき大切な能力の一つと考え、あえて実施に踏み切ったわけです（と言いつつ、その方が教師の方もコミュニケーションしやすいのです）。

各クラスの風景

私は四クラスを担当していますが、クラスの中の微妙な人間関係が、発表授業ではいっそう色濃く出てくるため、それは恐いくらいでした。

一クラスは明らかに失敗です。クラスの中で聞くムード、聞いてもらおうというムードがなく殺伐とした関係に終始。説教調の私に一部の女子が反発し、散々でした。

また一クラスでは、同様に聞くムードがいまひとつなのですが、不思議と個々が投げやりにならず、新鮮な気持ちで発表に取り組む生徒もいて、たくましさを感じました。

この違いはどこからくるのでしょうか？ 私が思うに、ユーモアのセンスとムードづくりの感覚をもった男子が存在し、彼らのひと言がクラスのムードをやわらげていること、また、まじめさがある程度通用するメンバーが何人かいることかもしれません。

祖母のリハビリ体験と、老人保健施設の問題提起をしたU君、アメリカのある俳優の自然保護運動を取り上げたTさんの発表には魂がこもっていてよかったです。

しかし、最後の発表でレポートAを提出してないH君に、何でもいから自分の主張したいことを話せと言ったのが運の尽き。いきなり教師批判を始めてしまうから驚いてしまいました。恨みつらみが出てきてしまったのです。出てしまったからには後にはひけず、よしこうなったらバトル戦かと、こっちも覚悟を決めて腹をくくり、「売り言葉に買い言葉はなしヨ！」と釘をさして、十五分。クラス中

が注目して、どうなることかと見守りました。

「一人に対し、多勢で圧力をかけることと、体罰について」不満をぶちまけた彼に対し、私は「学校は集団の中でどう行動していったらいいかを学ぶところ。一人の勝手な行動が、集団のバランスをどう崩すのか。言葉と言葉で分かり合っていく難しさ」をぶちまけたのですが、かなり感情が高ぶって緊張していたので、それをやったことがどうであるか……ちょっと軽率だったかとも思います。

H君には最後に、「君の発表には生活体験から出た説得力があるし、その表現力を私は評価したいと思う。だけど、君はレポートも出していない。何にも読まず、何も調べず、その点で努力していないよね。いろいろな発表の方法がある。いいと思うけれど、家庭科ではそういう努力を大切にしたいから、そこを評価していきます」と、ここまで言っていて、教師の評価権を楯にした嫌らしさをふと感じてしまった私は、「でもさ、表現力とか説得力まで評価されちゃってイヤだと思う？」とHに質問してみた。Hはあっけらかんと「いや、オレはうれしいよ」。

彼は書くこと読むことなど、文字で思考していくことと、ことごとく拒否していて、わがままと言えばわがままです。手には負えないが、体験の中から挑戦的ともいえる自分の哲学

を掴み取っているようにも見えます。しかし、私も体験上、彼のような、ある意味で潔さを持った生徒に同調する生徒が増えていくと、これまたクラスに嫌なムードが生まれることがよくあることがわかるので、いやはや、疲れること……。

授業のあとで一人一人の評価とポイントのメモである、レポートBを読むと、「おもしろかった」、「先生も大変だなあと思った」、「集団生活について深く考えた方がよい」等、いろいろな受けとめ方をしていました。

しかし、生活の中で生まれた「うらみつらみ」が底にあると、けっこう発表にも迫力が出るものです。

また別のクラスでは、特に全体的に仲がよいわけではないのですが、学習するムードと緊張感も適度にあって安心して発表を見ることができました。このクラスには、私自身が無理なくコメントを書けそうに思ったので、発表のあとでお手紙風にプリントを出しました。

アダルトビデオをめぐる

さて、最後のクラスですが、私のイメージではコギャル風女子と、妙に明るくおしゃべりな男子が多い、全体的に

面倒なことはしたくないといったクラスでしようか。

コギャルたちのボス風のIさん、Sさんの化粧をめぐる発表で、実は、『We』（九六年一月号）の特集「装う」の中の入れ墨の話がおもしろかったので、それについて質問したところ、ことごとく、ずれてしまいました。あとでK君が、廊下で私をよびとめ、「先生、いくら言ってもダメだよ。今がよければいい……という人には……」（「なぜ？」を楽しむという気分がない人には、別のアプローチでないと互いに平行線か……？ うーん）。

さて、このK君、実は（気分屋でエッチでひょうきん者の）Y君と組んで、テーマはズバリ、「アダルトビデオの光と影」をやるといっているので楽しみにしていました。というのは、Y君がビデオの鑑賞の仕方をやると言ったとき、「それはダメ。性風俗の問題点とセットならOK」と言っていました、それでも不安が残るので、K君には本やコピーなどヒントになるものを渡したのですが、なかなか発表にならず……。

Y君は、まず自分のAVビデオ体験を話し始めました。

小二で近所のおじさんに呼ばれて、でも刺激が強すぎて一〇分も見ることができなかつたとか。Y君が結論として言ったのは、法規制しても、ビデオは売ればいいことが基

本なのでどんどん出回る。問題は、小学生など性知識を持たない者への影響と、犯罪の手法になるかもしれないということ。

突然、いつも斜に構えたN君が、「先生、ソープなんかでは、どこまでやると罪になるんだあ」と言い出したので、私は答えにつまってしまいました。日本は法的に何が問題か、私も学ばねば……（恥ずかしい話ですが）。

期待よりもあっけなく一般論で終わりそうなので、火に油を注ぐが如く、「ところで……」と、『Hot Dog』という雑誌を取り出しました。表紙からしてドッキリのヌード女性の後ろ姿。あの手この手のセックス情報と写真がぎっしり詰まっていて、見るだけで「もういいよ」という感じ。それでも性病の解説や宮台真司のコメントには興味を持って、そこに付箋をつけて教室に持って行きました。とたんに意気の高まったY君。ぴらぴらとめくって黒板に妙な文字を書き始めたので、こりゃいかんとはかりに、「これを見て私はびっくりしたけど、こんなのを男子高校生が読んでいるのをみんなはどう思う？」

「センセエ、これくらいは、今は中学生の方が読んでるよ。もっとすごいのをみんな読んでるよー」

と、Aさんは明るく、「もっとすごい」を手足を使って

表現してくれた。笑ってしまいそうになるのを、オツとこらえて、

「でも、ここまで露骨だと、これがあたり前になるといやじゃない？ 拒否反応起きちゃうヨ。美意識に反するヨ」

「センセエ、子どもいるんでしょー。先生は子ども作るためだけにSexするのー」

「そーだよー、信じられないよ。そんなの」

と男女ともから猛反発を浴びて困ってしまいました。

「私のプライバシーのことだから言いたくないけど、でも私はね、この写真の裏にある心の背景がイヤなのよ。同じ行為かもしれないけど、その関係がどうにもいやなのよ」

なんて、分けのわからない言い訳をしていましたら、ボソッとクールなAさんがひと言、

「一つだけ質問してもいい？」

「あっ、はいどうぞ」とY君。

「なぜ、彼女いるのにさあ、ビデオなんか必要なわけ？」

「だってさ、いつも一緒にいられないでしょ」

クラスにいるY君のガールフレンドのFさんは、その時照れてまっかになりました。

しかし、時間がなくなりそうなので、このような情報が女性に対するイメージを固定化させ、性の二重規範が

り前になることで起きる人間関係のさまざまなトラブルを伝えたい私は、うっかり口がすべって、「たとえば、私の夫が性風俗なんかに行こうものならせたい許せない！」と言ってしまったところ、一部の女子が、けっこうむきになって、「先生は買春している人への偏見があるよー！」（そう、確かにそういうところはある。でも、ひとくくりに「買春」への偏見と言ってしまうところもある）。

そのやりとりの中で感じたのは、お金のためにその仕事を選んだ人がどのようなひどい運命になろうと、やっぱりその人の責任であって、「社会システムの構造上の抑圧」という視点では考えにくいようだといいことです。

「そんなこと言うなら、先生、その人たちに責任取れるの。どう、取るの？」

私は方向をかえて、性産業で働く人のプライドを強く感じた話に切り換えました。自分をモノのように扱うお客さんに対し、本気で「No」を言うことのできる、自称セクシーエステティシヤンのMさんの話です。

セクシュアリティのあり方を認めながら

ここで時間切れとなりました。今後の方向として目指し

たいと思ったのは、システムや意識から生まれる恨みつらみのできる限り間接的に伝えながら、同時に元氣の出る発想もいっしょに考えていきたいということです。さまざまにあるセクシュアリティのあり方を認めながら、互いに合意しながら楽しめるコミュニケーション力、もしくはそのイメージだけでも残したいと思っています。

そう言いながら、まだまだ心がつっぱっています。私自身ももっともっと自分のセクシュアリティをみつめ、元氣になれる発想と体験から出る言葉を持ちたいです。そういう意味で、すぐくユニークでおもしろい、キム・ミョンガンの『恋愛の基礎Ⅱ』もつと楽しいセックス』（小学館）、ぜひ一読してみてください。

余談ですが、このストレスのたまる仕事から私の心を潤してくれたのは、小二の娘のために図書館から借りてきた児童文学、安房直子さんの『ゆめみるトランク』でした。登場するトランクや一郎さんやネコなど、互いのユニークなアイディアで、だんだん元氣がでる、生きるはりが出てくるというとてもかわいい物語です。そうそう、こんな心持ちで暮らしていけたら、「どう責任取るんだ」なんて言葉はいらないのね。

「僕が、科学から家庭科に移ったのは、科学に限界を感じたからなんだ。原子爆弾とかサリンとかあるでしょ。環境は悪くなる一方だし。科学じゃ地球は救えないって思ったわけさ。で、家庭科ならそれができるんじゃないかって。愛は地球を救う？ じゃないけど、家庭科が地球を……ハハハハ。僕は新しい家庭科を創りたいんだ。みんなと一



緒にね。料理・裁縫だけじゃない家庭科を。で、家庭科を通じて、自分の生き方を考えていって欲しいんだ。僕が目指すのは、地球市民の家庭科だからね。だけど、今の僕には、それをやる力量と経験が不足しているんだ。だからみんな協力してくれよな」

ガタツッ！ン！誰だー！授業の初っぱなから寝てる奴はー。起きろー。
「(目、コシコシ) センセー、はやく調理実習やろうよ」

いよいよ二年目の家庭科が始まった。うーん、ちょっとだけ余裕って感じかな？ 去年に比べると、気分的にずいぶん楽になった。去年教えた生徒の顔も何人か見える。ホッとするよ。

去年は、自分の授業が生徒に浸透しなかったように思った。だって、バレンタインのチョコ、生徒からは一個もこなかったんよ、トホホホ。こんな

ん、僕の輝かしい？ 教師生活二〇年の初の汚点だぜ。ばかばかしいって？ だってもらえりゃ嬉しいんだ。いつもは配るほどもらって、家に持ち帰って自慢していたのにさー、情けないっただけじゃない。きつと、マズイ授業やってたんだよなーって思ってた。

そしたら最初の授業のあと、生徒が数人教室から飛び出してきて、ニコッてしながら、「センセ、今年もよろしくね」だって。ウーン、ういやつじゃ、ウンウン。

廊下ですれ違った生徒、「今度、家庭科、先生じゃねえんだ。俺、先生がよかったな」。オー、うるうる。

「俺より、先生が持つと思ったから食物取ったんだぜー、裏切りだぜ」。ン、ほーか、ほーか、そりゃー悪かったな。お世辞にしてもね、嬉しいよね。今年も家庭科の授業ががんばるかんね。

卒業式前の最後の登校日は予餞会です。カラオケ、バンド、ゲームなど全校でのお楽しみ会、その主役が彼女たち三年生とその担任です。

私が新採で来た年の予餞会で、「担任へ花束贈呈」をクラス全体で盛り上げて担任への「感謝」を表わしているとてもいい雰囲気的女子クラスがありました。行事でもすごいエネルギーを発揮するクラスで「最後まで決めたなあ」と見ていました。

担任は当時、今の私と同じ歳でしたから、「うらやましい」と感じる一方で、「これだ!」という自分の中での現実的な目標となりました。

あのクラスを意識していたものから、担任を持って、ことあるごとに「あのクラスはすごかった」と話していました。

特に印象深いのが、合唱の朝練習を

生徒だけで前庭でやっていたことです。新採の私は、「この学校でもこれだけのことができるのか」とびっくりさせられました。



二年生の時、この話をした翌日、彼女たちも前庭で歌いました。

振り返ると、担任の想いに彼女たちはその後もよく応えてくれました。

予餞会で何をしでかすか？ 内心、期待していました。

伏線があって、企画審議の生徒会の打ち合わせで、一度は原案から消えかけた「担任花束贈呈」に我がクラスは猛反対をして、結局プログラムに残したという話を耳にしていたのです。

ところが何も起きないで終わりました。ちょっとがっかりして、帰りのホームルームへ行くと、教卓の上でっかいケーキがあり、ろうそくの火がゆらめいていました。中へ入ると、全員で「ハッピー・バースデー・トゥーユー」と歌ってくれました。翌日が私の誕生日でした。

ドラマのように幸せを実感した一日でした。そして、私と彼女たちも、誰かの目標になっているのかもしれないと思いました。

葛森樹の巡業日記



③

葛森樹

タツル

お元気ですか？ 今月の巡業日記は私をとりまく日常を書きとめます。

私の目に映る「この十年変わらぬ」というものは、いわゆるふつうの人の多くは、相変わらず誰かをばかにすることで幸福を簡単に得ている、という事実です。世間から「オカマ」と嘲笑される時の私は、彼ら彼女たちに幸福を与える「特上のネタ」でしょう。

ネタにされた者の気持ちがどうかと言うと、場所を問わずに不特定多数の人から突然敵意や嫌悪の嘲笑を浴びるので、心が痛くて顔が歪みます。

例えば、街のレストランに入れば、注文する私の「男のような」声でお客様も従業員も一斉に視線を向けます。店内の空気が瞬間凍りつく。そして指をさされ、顔を執拗に覗かれ、ひそひそ話と嘲笑と。かわいそうに、ご飯を楽しむにしていたパートナーの顔も「涙くん」になってしまいます。失礼な客や従業員に抗議した時の疲れ方も半端ではなく、近頃はホテルでご飯を食べ

ます。気が全然楽です。また背の高さからのセックススチエックで、すれ違わざまの嘲笑も。……痛いものです。

私たちの気持ちに関係なく、これが実際に、日に何度でも起こります。

結局、人はジェンダーの問題以前に、下品で、粗く、そしてどこまでも残酷になれる自分が嫌いにならない限り、差別することから幸福を得るでしょう。

このため、最近の私はそのようなことよりも、喜びのことを考えています。先日渋谷で見た森下洋子さんのバレエ「白鳥」のような、芸術のなかで人間であることを越える瞬間を体現する魂に、畏敬の念を覚えます。美に震えてしまい、言葉を失って泣きました。

いかに自分が空っぽだったのか、一杯生きてきたけれど、美を知るには貧しかったのだということ、はつきり理解することができました。本当に、ピュアーな美に、これから数多く出会いたい。喜びに震えて喜びを創造したい。まずは……黙って仕事します。

セックスレスなわたしたち

望月 七海

結婚には楽しいセックスがついてくると思っていたし、子どもができるまでは、回数も内容もそれなりのセックスをしていた。ところが今はセックスレス。それは、一人目を受胎した時に始まった。// 試しの一回//で二人目を妊娠したあとは、受胎と同時に始まり現在進行形。なぜ、そうなったのか...: 特に強い理由は見つからない。強いて言えば、夫と私のセックス観の違いなのだろうか。私が望むのは、コミュニケーションとしてのセックス。一緒に暮らすパートナーとして、心を通い合わせるために必要なもの。一方の夫は、セックスは子孫繁栄のものと考えているらしい。だから彼にとっては、もう子どもを望まない二人には//セックスレスが当たり前//になるようだ。

「結婚という法律で守られているのだから、セックスで愛を確かめる必要はないよ」とも言う。産前産後に夫が求めてこないのは、彼の優しさだと思っていた。子育てにゆとりができて、彼の様子は変わらなない。次第に//男の性//に対する心配が不安になり、浮気や病気を考えるようになった。このままではいけないと、夫に聞いてみた。「なぜ、セックスしたくならないの?」「たまったもの(精子)は、どう処理するの?」「私以外の人とならセックスしたいと感じる?」と、たくさん聞いてみた。何度か話し合ったが納得する答えはない。「あんまり言われると、余計する気がなくなるよ」と。こうなると、夫とのセックスにこだわっている自分が、ばからしくなる。「もう、他の人としちゃうから」とチャンスを探そうとする。でも、そんな自分にブレーキをかけるもう一人の自分がある。

ある日、捜し物をして夫の車のトランクをあけた。工具箱の中に見

リレーエッセイ③

覚えのあるハンカチ。開くと金色をした四角い小さい箱。中にはコンドームが入っていた。瞬間、頭の中は真っ白になり、心臓は麻酔なしで取られたように痛んだ。確かに夫の不倫を疑ったこともあったが、する人ではないと信じていたから……。私は元に戻し、普段どおり振る舞う。悩みに悩んで、私はいいやな女になりコンドームの数を確かめた。足りない。確実に減っていくコンドーム。なくなつてホツとしたのもつかの間、新しい箱が二つ。「あなたが私以外の人とセックスしていたら相手の女性を刺すかもしれないよ」。夫は軽く笑つただけでなにも答えなかった。ひと月、数は変わらなかつた。が、また減つた。「もーやだ」。でも、現物をつきつけ詰問することができない。私は、自他共に認める〃パパっ子〃で育つた。夫婦仲はあまりよくなかつたので、いずれ別れるだろうと思つていた。高校の時、それが現実になつた。「パパは七海より大切な人ができたんだ。だからもう一緒に暮らせないんだ」。不思議と違和感はなかつた。数日後、パパは実の父でないことを母から聞かされた。これもなぜか納得できた。幼な心の中にいる〃父の姿〃がその理由。そして離婚をする時「パパが七海の認知取り消しを要求してきたの。もういいよね」と母は言つた。なにがいいの？ 私はなんだったの？ 強いショックを受けた。

セックスストレスでいる不安、他の人とセックスすること、コンドームのことを夫に問うこと、全て離婚に結びついてしまう。私は同じ思いを子どもには味あわせたくない。でも今のままセックスストレスで終わりにたくない。一生セックスしないのも、夫を嫌いになることも、離婚もイヤ！イヤ！ ぜーんぶイヤ！

違いがわかる

クワッーッーッーな相談室

坤 恵依子

向田邦子のドラマで「寺内貫太郎一家」というのがありました。父親役を小林亜星が演じたのですが、このおやじさん、何かと言うと、怒ってちゃぶ台をひっくりかえすのですね。私はこういう人がとても羨ましい。やられるほうはたまったものではないけれど、やるほうは気持ちいいだろうなと思います。よく、夫婦ゲンカで、モノを投げ付けたり、茶碗を割ったりする話を聞きますが、私も一度やってみたいと思いますが、でも、やれません。皿を持ったまま、グウッと怒りをこらえて、今、これを投げ付けてやったらスカッとするだろうなとそこまでは考えるのですが、やれない。背中を丸めて片付けている自分の姿を想像すると、よけい惨めに思えてきて、結局怒りを飲み込んでしまうのです。

育った家庭でもそういう人はいなかったし、連れ合いも穏やかな性格で、ケンカはするけど、口喧嘩止まり。私は根が二枚目だからできないのかなと思っていました。ところが、これをやってくれる人が家が家にも出現したのです。怒ると同時に、足や手が壁やドアに向かう。ある日、子供部屋に入ってみると、壁に穴があいていたりして、「どうしたのこれ？」と聞くと、「アア、コナイダ、アタマニキタカラヤッタ」とケロっとしている。ドアだって、さすがに厚い木製だから穴こそあいてないが、結構傷ついているし、他人が見たら家庭内暴力のある家だと思っだろう。どうして、そんなちょっとしたことで、ここまで怒れるのという疑問は、『シュタイナー教育の四つの気質』（イザラ書房）を読むまで解けませんでした。この息子は胆汁

質だったのです。

この四つの分類について紹介します。たとえば、目的地向かって歩いていたら突然目の前に壁が立ち塞がったと想像してください。あなたならどうするでしょうか。

①すすごと引き返す(憂鬱質)

②じっとそこで立ち止まったまま動こうとしない(粘液質)

③カッとなってその壁を蹴飛ばす(胆汁質)

④平気で乗り越えて向こう側へ行ってしまふ(多血質)

これらを自然の要素にあてはめると、①は地(固体)、②は水(液体)、③は火(熱)、④は風(気体)となります。体格から見ると、憂鬱質の人は痩せ型で、血色はあまりよくなく、歩くときにうつむき加減に歩く、粘液質は丸い感じで血色がよく物に動じない、胆汁質は割りと赤ら顔で筋肉質で踵で地面を蹴って歩く、多血質の人は割りとプロポーシオンがよく、つま先だつて宙に浮くような感じで歩くなどということが書かれています。

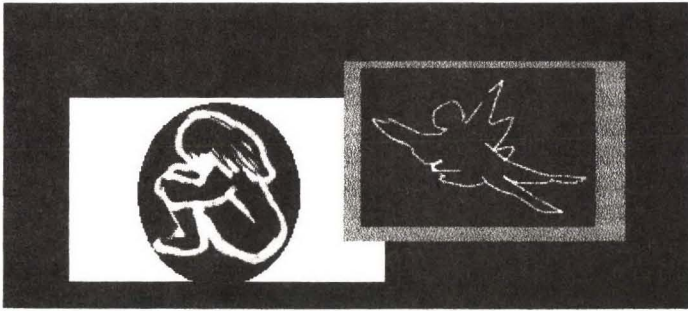
学校で、教室の席順を決める場合、憂鬱質の子は、後ろの方に、粘液質は窓側に、胆汁質は廊下側、多血質の子は前の方にすれば、クラスの雰囲気は落ち着くと言っています。憂鬱質の子はいったん与えられた問題に気持ちが向かうと、別の新しい問題に心を向けなおすのがむづかしいの

で、後ろにしておいても静かに勉強している。粘液質の子は、不活発な感情を活発にするために明るく窓際に、胆汁質の子は活発すぎるくらいなので、落ち着かせるために暗い廊下側に、多血質の子はいちばんおしゃべりで、すぐに気が散るから前の席にといいわけです。

また、シュタイナーは、それぞれのタイプによって対応の仕方も変えなくてははいけないと言っています。たとえば、学校で、子どもが雑巾バケツの水をぶちまけてしまったとき、胆汁質の子には怒鳴ってはいけない。その場では先生がさっさと水を拭いて、翌日その子一人を呼び出して昨日やったことを冷静に話して聞かせる。他のタイプの子にはこの対応は通じないとか、先生が読んだらとても参考になることがたくさん書かれています。もちろん、先生も自分がどのタイプかということを知っておく必要があります。自分と違うタイプの子は理解しにくくて、反感を覚えてしまうことが多いですから。

校内暴力や家庭内暴力でも、胆汁質の子がやっている分にはあまり心配しなくていいが、憂鬱質の子がやるようになったら、これはもう魂の最後の叫びだから大いに心配しなくてはいけないと言っています。

私がお皿を投げ付けられないのは当然なのでした。



Jami

居場所考⑱

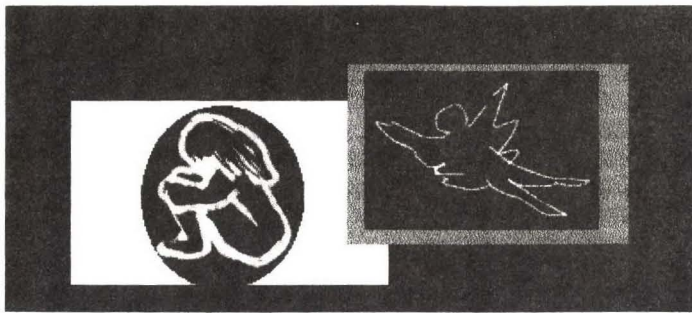
明るい地下室

.....

水田宗子

一九六〇年代の中頃、ロンドンでアパート探しをしたことがあった。二歳にならない子連れで、新聞広告を手にも市内をあちこち歩き回っては断られるという苦い体験は、今でも忘れられない。その頃、ロンドンの空家・空室広告には、No Babies, Asians, and Dogsと、おおっぴらに書かれているのも少なくなかった。アメリカ英語に対する偏見も大変なもので、タクシーやバスに乗っても、アメリカ人の英語はわからない、と繰り返し言い直しをさせられる。日本人のアクセントのほうがよほど好意的に聞いてもらえた。そして、アパート探してアメリカ人がたずねていくと、広告にあったよりも高い家賃を吹っかけられたりするのだった。大昔の話である。そんなふうにして、住む場所が見つからないで一カ月以上も過ぎると、空いている部屋は地下室ばかりに思えるようになった。しかし、地下のアパートは採光に工夫が施されてあって、光が差し込むように設計されているものが多く、天井は低めだが、暗いイメージはなかった。

カリフォルニアでは、地下室や屋根裏部屋のある家をほとんど見なかった。地下室には



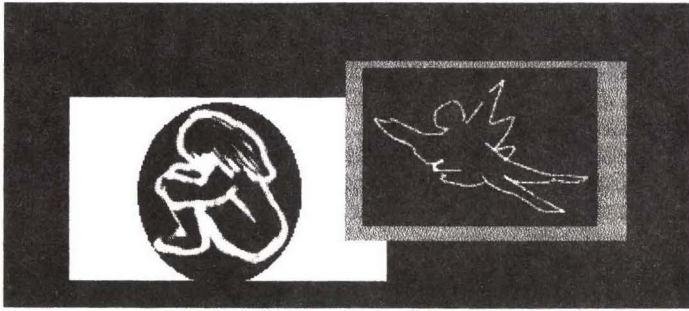
Tami

ガラクタを雑然と投げ入れておいたまま何年も整理しなくてよいような気にさせるところがあり、またそれだけに、そこからいつか思いがけないものが出てくる楽しみと恐怖みtainなものがある。東部から移ったカリフォルニアの家は、広い土地にいかにも明るく建てられた広い平屋で、なんとも陰翳に欠けるのが不満で、私を落ち着かせなかった。

最近、テレビや新聞で、地下室のあるマイホームの広告をよく見る。ドライエリアという、ふんだんに光りを取り入れた明るい設計である。ティーンエイジャーの子供に見せたら、真っ先にそこを自分の部屋にほしいと言った。都市には住宅地が不足し、地下が高いので、地下室を住める場所にすることは合理的なことにはちがいない。個室の子供部屋、システムキッチン、ウォークインクローゼットや主婦の仕事場、広い収納スペース、夫の書斎、蔵のある家、二世帯住宅などなど、次々と考案され、セールスポイントにされていく住まいのアメニティは、女性や子供のあり方、夫婦の関係など、家族の変容を物語る記号的な意味合いをもって興味深い。採光の効いた〈住む地下室〉も、そうした住まい空間の工夫、考案の延長上に出てきたのだが、ただ、〈明るい地下室〉というのは、それ自体、言葉の矛盾をはらんでいて、とまどいを感じさせるのである。

私が地下室について考えたり書いたりしたのは、ポオがきっかけだったが、もちろんそれ以前にも子供の頃、押入れの中に隠れたり、母や姉に知られない秘密の居場所を作ったりする欲求は強かったし、それは誰にも覚えがあることではなからうか。そういうとき、秘密の地下室が太陽のさんと降りそそぐ明るい場所だったりしては、居心地が悪いのではなからうか。

心の深層の暗喩としての地下室は、ポオによってさかんに使われ、ドストエフスキーやカフカやベケットによって、すっかり近代の文学の中で定着した。人に知れない秘密の夢



Tami

や願望、トラウマや怨念をため込んだ、心の地下室は想像力の貯蔵庫、近代表現の根拠としての場(トポス)となった。秘密だからこそ、暗いからこそ、地下室は、理性や法律や道徳に支配されている日常社会を離れた、心と文化の深層への、夢の異界への戸口となった。その地下室に昼間の明るい光が差し込み、そこが家族の設計や計画にもとづいた合理的な空間になったら、人々は隠れ場所を探してどこへ行くのだろうか。子供たちのオタク現象は、子供に個室が与えられるようになったことに原因しているといわれているが、親によってより快適にと設けられた子供部屋は、親や社会からしばし隔離された自分だけの居場所というよりは、かえって親が保護し、支配する、社会の延長としての空間だったのでないだろうか。明るい個室は心の暗闇への入口にも場所にもなりえなくて、彼らはテレビゲームの中の洞窟に入り込んでいくのではないだろうか。

現代の文学や芸術表現が近代の深層を掘り尽したとは思わないが、最近の日本の文学作品中に地下室で書かれた様子が少ないことだけは確かなようだ。また、SFやファンタジーやスリラーも、本来は理性が心の暗闇に閉じ込めてきたものの掘り起こしとして、伝統的な表現のジャンルの隙間をぬって立ち現れてきたものだが、マンガやテレビゲームといった新しいメディアの開発に伴って、これらのジャンルの多くの作品が、明るく現代的な工房での、コンピューターによる開発チームの共同作業になりつつある。

深層が想像力の源泉でありえた、二十世紀の表現は終焉するのだろうかと考えていた最近、たまたま地下室に関わる二つの映画(『アンダーグラウンド』と『告発』)を見て、二十世紀の表現を根底から支えた深層の暴力的な暗さを、あらためて考えさせられた。

読者のひろば

米國 ライス淑恵

『We』四月号を楽しく拝読しました。

(中略)五歳半の娘の目に映し出された(性役割の)ステレオタイプ、成長することの一端は、社会の価値観も偏見をも吸収していくことにあるのだと、彼女を見ていて痛感します。したがって「十六、七歳にして、そういう『スリコミ』はしっかり根づいてる……」(吉田圭子さん)のは当然のことであって、だからこそ「生活を見直す」(ハブルという自主活動)や「混沌を学校へ」(楠原彰さんインタビュ)といった試みが、インパクトのあるものとして受けとめられるのだ、という気がします。

そういういわば概念崩しの努力に関するレポートは必要だし、読者のニーズもそこにあるのでしょう。しかし、もっと

幼少期の子ども、またはその環境についてのアウェアネスも育成すべき、さもなくば、『We』に代表されるフィロソフィーがいかなるものであっても、現状を後追いするだけになるのでは、というふうに思ったりします。

例を挙げれば、NHKの子ども向け料理番組「ひとりのできるもん」には、共働き家族増加の社会形態を受けて、子どもがサービスされるのみの存在から、自ら作る人になることを応援するねらいがあるでしょう。主人公も、女の子一人から、男女一人ずつに交替し、いい感じに進行しているなと思った矢先、以下のシチュエーションが。女の子の作った食事を一口ほおばった男の子が、「うまい、いけるよ。いいお嫁さんになれるよ」。女の子はぱっと華やき、「ジューンブラ

イド」という歌が流れ出す……。こういうふうに無意識にボロを出し続けておいて、「高校生向け家庭科講座番組『おとことおんなの生活学』がオープンします(略)厳しいご意見をお待ちしています」(「読者のひろば」山崎秀樹さん)と言われても、後手に回るというだけでは片付かない、重大な構造的矛盾があると思うのです。特定の番組だけで(あるいは、教科と置き換えてもいいのですが)もつともらしいことを唱えても、十何年にわたるインパクトを、そう易々とくつがえすことはできないのではないのでしょうか。結婚後、夫改造にトライするより、高校、大学教育をターゲットに置くのは、先手を打つと考えられるのかも知れませんが、幼児と関わる私の日常の真実としては、すでに難問が山積みしているのです。

四月号を読んで楠原さんのインタビューには何か所も考えさせられた。

「タイに行ってもインドに行っても、見えてくるのは自分の内面、『何もできない自分』を見てくる、といった場合が多い。……自分の弱さを中心に世界が回っ

てしまっているということから、なかなか自由になれないんですね」「外に出て

いけないですよ、怖くて。それで、同じような人たちが集まってワークショップ

マニアみたいになってしまってます」「血の出るような現実と出会っていかなければ、

何のために学ぶのか意欲など生まれようもない」「豊かな表現なんて、豊かな沈

黙のほうがよほどいいのに」

どれも私に向けられたことばとして、ありがたく、かつきびしく受け取った。

「賢治の学校岩手」以降、つづけて三回の自分をつめるためのワークショップ

に参加した。フェリシティ・オズウエル

さんの「マンガラ作り」、津村喬さんの

「一日編集学校」、蔦森樹さんの「ジェンダーを超えて」と。どれも個性豊かな

講師と、真剣な参加者で構成されていたため、得ることはいろいろあった。

にもかかわらず（またはだからこそ？）三月くらいから、「しばらくこの手のものには距離を置こう」と思っていた。

「ワークショップマニア」と呼ばれることに抵抗が強くあり、「私はそんなもの

にはならないぞ」という強がり、「このままでいくとなってしまうそう」とい

う危機感との両方があったからだ。

でも今、思うのは「ワークショップマニアだっていいじゃない、自分の弱さに

おぼれていたっていいじゃない、とことんおぼれてしまえる方が、中途半端にわ

かったような気になっているより、先にながるのではないか？」ということ。

「絶望こそが希望である」ということばにとらわれすぎているのかもしれないが。

反面、「現実生活のさまざまな人間関係

を豊かにしていかなければ、何もかわらない。そのための時間とエネルギーを確

保には、ワークショップに参加したり、弱い自分にこだわっている暇はないよ」

との声も私の心の中から聞こえてくる。

当面、ゆれて生活していくしかないの

だろうな。ただ、現在はつきりしているのは、コウカウンセリングでの月に一

二回のセッションがあるからこそ、私はおだやかに暮らしていられるということ。

稲邑さんが「依存症になってしまいうんだと思うんです。ほんとうは日常のなかで

そういうことがやれるといいのにな」と言われるのも、もっともです。でも私は、

日常のなかでそういうことをふつうにやるために、依存症と言われてかまわない、これを活用していこうと思っていま

す。

「一度はおいで」と若者たちに呼びかけているのは、「エポック10」の一室にある「ティーンズの性相談室」。呼びかけ人はボランティアグループの「サポート・ヤング」。

この相談室がオープンしたのは、一九九三年の十月。九一年から九三年にかけて厚生省のリプロダクティブ・ヘルス研究班が「思春期における性行動」研究の一環として「若年妊娠を防ぐためには？」「妊娠した場合の医学的・社会的支援のあり方は？」をテーマに取り上げました。その結論の一つとして、望まない妊娠を避けるための性教育の大切さが再認識されました。また、①若者が自分自身からだを知り、異性のからだと心がいかに自分と異なるかを知ること。②家族や教師、地域の人々が青少年の置かれている環境を知ること。③気軽に相談できる場所、の必要性を感じました。

これらの要望に応じて相談室が開設され、「性に関する、からだと心の問題」に関心のある医師・助産婦・教師・心理関係者・性教育関係者がお話を聞き、相談に応じています。必要に応じて、医療関係・カウンセリング施設などの紹介もしています。また、参考資料——図書

(人間の性と生、思春期のからだと心、排卵・射精・月経・妊娠・出産・育児・避妊・人工妊娠中絶・エイズ、性教育のあり方)、性教育団体についてのリスト、ビデオ、教材(骨盤模型、受胎調節指導用セット、妊娠検査薬、小中高校生性教育授業用セット)等の閲覧もできます。

相談室には、外生殖器奇形、マスターベーション、妊娠、拒食、過食の心配を持つ若者のほか、看護婦・保健婦を目指す学生や性教育に関心のある教師などの来室があります。子どもたち、関係者が気軽に知識を得られる場が全国各地に欲しいと思います。

この相談室に関わっていて、性教育以前に自分自身を知らないのは、案外大人かも知れないと感じています。また、思春期の子どもの親は更年期予備軍なので、思春期の資料の横に更年期の資料を並べ、親は自分の身体と心の健康に留意し、よき老後に備えて欲しいと思います。

● からだと心の相談日

第一金曜日・午後四時～八時・医療関係

堀口雅子(虎ノ門病院・産婦人科医師)

第二金曜日・午後四時～八時・教育関係

高柳美知子(NHK学園生涯学習講座講師)

山本直英(「人間と性」教育研究所所長)

第三金曜日・午後四時～八時・心理関係

安達優雅子(「こども一〇番」電話相談員)

村瀬敦子(桐朋女子高等学校教諭)

● 問い合わせ先・エポック10(豊島区立男

平等推進センター・豊島区西池袋1-11-1

メトロポリタンプラザ10階)相談室

TEL 03・3980・7830

◆今月号でバリアフリーという言葉は何回も目にした。昨年の暮れ、夫がアキレス腱を切って入院した時、一番困ったなと思ったのは、わが家がエレベーターのない団地の五階だということ。本人は正月だからとさっさと退院してきて、松葉杖でリズムカルに上り降りする。「歳とってからだど、これはきつい」とは言っていたけれど、私にはできそうもない。足の怪我はぜったいしない、歳も取らないように気を付けよう、では済まないからね。バリアフリーを切に望みます。(吉田)

◆五月の連休の時、主婦湿疹(この名前も何とも言えない)が、タイミングよく悪化し、三度の食事と洗濯はすべて夫がやることになりました。水仕事から解放されて、湿疹もきれいになってきた連休も最後の日、夫に聞きました。「三度の食事づくりと洗濯が永遠に続くとしたらどう?」。夫は即座に答えました。「やだ、休みたい」。なんてイイ感想。大変有意義な9連休。しかし、それから三週間たった今、夫が台所に立つ時間は大幅に短縮されました。元の木阿弥。(山下)

♣「ザリガニにあげるからハムちょうだい」。朝ごはんもろくに食べないで4歳になる息子がザリガニを<かわいがって>いる。でも、この間までこの水槽にいたカエルはミイラになったばっかしなんだよね。その前は冬眠に失敗したカメがミイラになっていた。「すぐに忘れちゃうんだから、逃がしてあげなよ」と言う、「今度はだいじょうぶ。でも、ママも金魚殺したんだよね」と言う。「あれは……別に、ママが殺したんじゃないでしょうが……」こうして庭の片隅に石が積まれていく。(中村)

♣明日が版下の納期日という時に、編集後記を書いている私です。ここまでは前月号と変わらず。毎月、来月はもっと合理的に作業ができるに違いないと期待するのだけど、ますますひどくなるっていうことは、私たちは学習能力というものが皆無なのかもしれない。一段着いたから温泉に行って、山に登って、腹の底からワーッと叫ぶんだ。CAPのワークショップで、「危険な大人から逃げる時に出すんだよ」という叫び声は迫力があったな。あんなふうに叫びたい。(河村)

★忙しいのは年中とはいえず、4月、5月は「冷え症撃退フォーラム」の準備が重なり死にそうでした。「来る者は拒まず」と「深く考えない」がワンセットになっている危ない人なので、昔から怖い目には散々あってきたのですが、不思議に何とか生き延びてきたのでちっとも学習しない。この調子で死ぬまでバカをやっていくしかないのでしょうか、多分。★武田秀夫さんの「シネマの魔」は7月号までお休みですが、ご本人はお元気ですので、ご安心下さい。(稲色)┌アリス・ウォーカーのビデオの詳細はフォーラム横浜にお問い合わせ下さい(045-224-2002)。購入申込はスタンス・カンパニー(03-3818-9889)まで。┐夏季フォーラムの分科会でCAPのワークショップが開かれます。┌毎月1週目の1日(その月によって未定です)おしゃべりに花を咲かせながら「We」の発送作業をしています。お手伝いにいらして下さる方大歓迎です。ご連絡下さい。合評会・拡大編集会議も開きたいと思っています。日程を調整したいと思いますので、ご希望の方ご連絡下さい。(編)

くらしと教育をつなぐWe

〒154 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイランドハイツ703

Vol.1.5 No.3 1996年6月1日発行

TEL/FAX 03-3424-3603

定価600円(本体583円)

郵便振替 00130-7-754314 (有)フェミックス

年間購読料/定価6800円(送料共)

富士銀行 池尻大橋支店 普1501277

発行/フェミックス 編集/稲色恭子 河村ふみ 中村泰子 印刷/(有)イー・エム・ビー 1代田区龜田22-5-2

※本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

!! 中 講 開 座 講

フェミニストセラピイ

カウンセセラ―養成講座

●昼のコース・毎週火曜日 10・30～12・30

定員15名・1期(10回)参加費3万円

第1期「自分を見つめる」開講中

●夜のコース・毎週火曜日 19・30～21・30

定員15名・全10回・参加費3万円

5月28日から

「カウンセリング理論の学習」開講。

途中からの参加も受けつけています。

お気軽にご相談ください。

！前！の出ます。
受けなごこと相談
座の受なごこと相談
引きこんなんでも
講座の受けなごこと
相談してください

お問い合わせは

(有)フェミックス カウンセリング部門

TEL/FAX 03-3424-1637

〒154 東京都世田谷区池尻3-2-3 サンケイランドハイフ703

ますます面白くなる『We』
いますぐ、96年の年間購読のお申し込みを！

●96年既刊

4月号 学校に風穴をあけよう

5月号 自分を好きになるために

6月号 性の自己決定

96年・特集予定

7月号 女が元気になる

8/9月号 火を囲んできた人々の暮らし

10月号 風土と衣食住

11月号 宗教―超越的なものをめぐって

12月号 家族を考える

1月号 福祉玉手箱

2/3月号 フェミニズム97

●96年度定期購読料

(96年4月～97年2/3月号・10冊・送料込み)

6800円

●最寄りの郵便局でお申し込みください。

00130171754314 (有)フェミックス

●バックナンバーもぜひどうぞ

(10冊以上9掛・20冊以上8掛になります)



くらしと教育をつなぐWe 1996年6月1日発行 第5巻第3号
定価600円(本体583円 年間購読6800円送料共)
郵便振替 00130-7-754314 フェミックス